

# 「教育勅語」公布下における修身科教科書をめぐる教育方法論争

——口授法から教科書採定への転換過程——

The Disputes on Educational Method concerning Moral (*Shūshin*)  
Textbooks about the Promulgation of “*Kyōiku Chokugo*”

麻 生 千 明  
Chiaki Asoh

## 序 ——修身科教授方法の転換——

明治10年代より徐々に強化されつつあった教科書への国家的統制は、森文政期において検定制の導入により一段と強化されることとなった。ところで周知のように森文政期においては修身科のみは教科書を用いないで専ら教師の口授（「談話」）に拠る方針が採られていた。そのことの理由、教育観的背景については、前稿<sup>(1)</sup>において、「学制」期以降の修身科教育方法史の概観をも含めて考察を行ったところである。

ところで森文政期以後においては、明治23年（1890）の第2次「小学校令」および「教育勅語」の公布を契機として教科書検定制はさらに一層強化され、<sup>(2)</sup>その動向が明治36年（1903）の国定制の成立へとつながっていくことになるのであるが、その際に修身科教科書がその先導的役割を果たしていくことになる。すなわち森文政期以後は、修身科の教授法自体が口授法から教科書の採定へと方針が転換し、しかも修身科教科書に対する国家的統制は他教科に比して格段に強固なものとなっていったのである。

ところで修身科における口授法から教科書使用への方針転換は、明治24年（1891）10月7日、久保田譲普通学務局長より各地方長官宛に出された次の「通牒」に明示されたものであった。

「小学校ノ修身科ニハ教科用図書ヲ採定不相成様致度旨去二十年五月視学官ヨリ御通牒ニ及ヒ置候処右ハ自今採定ヲ要スル儀ト御承知相成度文部大臣ノ命ニ依リ此段及御通牒候也

追テ本文採定ノ図書ハ文部省ノ検定ヲ經タルモノタルヘキハ勿論ノ儀ニ有之候条為念申添候也」<sup>(3)</sup>

さらにこの「通牒」が発せられて約1ヶ月後の11月17日には大木文相による次のような「訓令」第5号が府県宛出されている。

「此等ノ諸教科目ニ於テハ皆適実善良ナル教科書ヲ撰定スルヲ要ス殊ニ修身ニ於テ多数ノ教員ノ腦裏ニ一任シテ教科書ヲ定メサルカ如キハ其当ヲ得サルモノトス」<sup>(4)</sup>

「教育勅語」の公布という状況下での修身科教授法の方針は、上掲の普通学務局長「通牒」および文相「訓令」によって示されたのであるが、口授法から教科書採定への方針転換をめぐることは、当時教育雑誌等において様々な論評が惹起され、かつ論争が展開されたのであった。<sup>(5)</sup>教師や教科書の問題を中心に展開されたそれら論議、論争は、要するに教育方法論争として特徴づけることが出来るであろう。

教育方法史ないし教育方法論争史という観点から修身科教育史を跡付けるという研究意図のもと、森文政期（それ以前も含めて）を考察対象とした前稿に続く本稿においては、森文政期直後の、「教育勅語」公布下における口授法から教科書採定への転換をめぐる展開された教育方法論争について考察しようとするものである。

## 1. 教師の実情（認識）に着目しての口授法否定論の展開——明治10～20年代——

修身科における教科書の採定を指示した明治24年（1891）10月の普通学務局長の「通牒」には、「説明」文が付されているが、それによると教師の資質についての実状（認識）が口授法から教科書教授への転換の大きな理由をなしていたことが窺える。<sup>(6)</sup>すなわち森文政期における「談話」に拠る方法は、教師自身が児童に対し言行の模範となり感化していくというように、何よりも教師の人物如何に大きく依存する方法であったと言える。しかるに「説明」によると「蓋教員ニシテ学徳共ニ高ク其言行欠クル所ナク身ヲ以テ模範ニ供シ能ク児童ヲ感化スル程ノ人物ナランニハ或ハ不可ナルヘシト雖モ此ノ如キ教員ヲ得ルコトハ容易ニ望ムヘカラサルナリ」<sup>(7)</sup>と指

摘されることになる。

このように口授法については、その方法自体の得失はともかくとして、口授法を効果的たらしめるためには結局のところ教師の資質や力量に依存せざるを得ない。しかるにわが国の大方の教師の実状からすると口授法は不適當であると判断せざるを得ないとの趣旨である。なおこうした類いの口授法否定論は早くも明治10年代の半ばからみられた。例えば明治16年(1883)刊の『大日本教育会雑誌』に掲載された「小学校教員ノ急務」と題する西村貞(当時大阪府師範学校長)<sup>8)</sup>の論説がある。

そのなかで西村は、先ず「今や我カ小学校修身科ノ教授ハ初等科第一年ノ前期ニ於テハ半ニ口授ニ拠リ漸ク進ミテハ誦読ト口授トヲ併用スルヲ法トス」<sup>9)</sup>と、まさに「小学修身書編纂方大意」(明治15年・1882)に則った当時の修身教授の状況を述べ、なかでも口授という方法について「抑此ノ口授ナル者ハ智識ヲ伝輸シ心意ヲ訓練スルニ於テ其功效極メテ大ナルヲ諸彦ノ異口同音ニ然リトスル所ナルヘシ故ニ口授ハ小学科ノ授業法中最大ノ利器ナリ」<sup>9)</sup>(傍点引用者)とまで絶賛している。そしてさらにその「利器」性の内容について次のように詳述している。

「尚範圍ヲ限リテ修身ノ口授ニ論及センニ徳性ノ涵養ハ心地ヲ陶冶スルニ在リ心地ノ陶冶ハ専感觸ヲ振起培養スルニ於テ成リ而シテ感觸ハ至当ノ激因ヲ受ケテ発起スル者ナルヲ既ニ前段ニ述ヘタリ然ルニ心意ノ作用ヲ察シテ感觸ヲ善養スルハ専事実ニ因ラサル可カラストストキハ之カ利用ノ器ハ將タ何レニカ在ル余ハ断シテ口授ニ在リト云フナリ……口授ヲ特ニ修身科ニ許ス所以ノ者ヲ察スルニ修身ノ教授ハ到底口授ニ拠ラサレハ実地ノ功ナシト思考セラル、ニ出テタルナラン」<sup>9)</sup>

このように西村は口授法的方法的長所を挙示しつつ、ただしそれはひとえに教師の人物如何に依ることであると次のように述べる。

「然レトモ利器ハ明達ノ手ニ在リテ著名ノ功ヲ奏シ拙劣ノ手ニ在リテ著名ノ害ヲ醸スハ賢哲既ニ之ヲ弁明シテ疑ヲ遺サズ去レハ凡庸ノ手ニ在リテ此ノ利器ヲ使用ストキハ仮令害ヲ醸スト雖又功ヲ奏セサルヘシ」<sup>9)</sup>

ところでその教師の実状という点について西村は「我カ小学校教員ハ一般ニ口授ノ才幹ニ短クシテ其方法ニ暗キノ評ヲ免レサルモノ、如シ是蓋遠ク由来スル所アリテ然ルニ非サル無ヲ得ス……事実ヲ敷衍弁説シテ以テ幼童ノ心情ヲ感発シテ善良ノ心地ヲ陶冶スルニ足ルヘキ方法ニ熟達セル者ハ日下ノ教員中將タ幾許カアル余ハ又断シテ少シナリト言ハサルヲ得ス」<sup>9)</sup>と述べるなど、かなり悲観的な認識をもっていた。

次の論説記事は、明治20年(1887)頃の修身教授の実

態を伝えるものであるが、わが国教師の口授の才幹に欠ける様子をありありと伝えている。<sup>10)</sup>

「今日の実際を見聞するに其の教授の法唯従来の読書法講義法は書籍を生徒に与へざるかために幾分かは変したるか如きも教師が参考書を暗誦し米り生徒の面前に佇立し生徒に向ふて講談する有様は疾言高語講釈師か太閤記を背誦するか如く演説家が得意の雄弁を振ふか如く己れ自身は其の講ずる所其の談する所を了解せるかは知らされとも(或は失敬なる申し分かは知らされとも己れ自身も半信半疑のものなきにもあらざるべきかとも思はるゝことあり)生徒はこれを見て毫も其の講談の何たるを解すること能はず其の講談の解せされはこそこれを聴かんともせずして呆然教師の面を見るか如きは最上の中なれとも或は他を顧みて耳語し或は小刀を以て机を削るものあり甚たしきに至りては笑語するものあり他の毛髪をひくものあるに至る……斯の如きありさまにては修身上の智識を生徒に与ふることは決して望むべからざることなり」<sup>10)</sup>

さて西村の論説に戻るが、先述した如き認識のもと彼は、教科用図書を選定強化しようとする当時(改正教育令期)の文部省の施策を評価して次のように述べている。

「夫我カ文部省ハ教則ヲ許可スルニ当リテ必其ノ教科用図書ヲ定メシメ口授参考ノ図書ト雖亦皆此中ニ掲ケシム蓋輕々ニ一見シ去レハ人ヲシテ定ニ狹隘窮窺ノ思アラシムヘシト雖余ヲ以テ之ヲ観レハ教員現在ノ状勢ニ処スル至当ノ方法ナリト謂ハサルヲ得ス」<sup>10)</sup>(傍点引用者)

後年の演説からも西村は、元来教科書必要論者であったとみることが出来るが、<sup>11)</sup>上掲の論説における口授法否定の最大の根拠、理由は「教員現在ノ状勢」におかれていたと言える。こうした趣旨の口授法否定論は、以後明治20年代にかけて盛んに展開されることになるが、明治16年(1883)における上掲の西村の論説は、それら論説の端緒的位置を占めるものと言うことが出来る。次に西村以後の主な口授法否定論を紹介することにしよう。

明治18年(1885)には田中登作による「德育論」と銘打つ論説が『教育時論』に載せられている。そのなかで彼は、明治10年代の儒教主義に基づく修身教授の実態について「孔孟ノ主義ハ細大トナク其ノ字句章句ヲ解剖シテ之ヲ生徒ノ頭脳ニ注入セントスルモノノ如シ此ノ如キ情態ナルニ由リ修身科ト云ヘバ人皆暗ニ陳腐主義ナリト思ヒ込ミ嘗テ己ノ品行ヲ養成スルノ基本ナリト考フル者ナン」<sup>12)</sup>と述べ、かかる修身教授は、まさに「兎戯ニ類スル者」<sup>12)</sup>であると痛罵している。

かく批判したのち田中は、修身科においては教師の人格、品性が特に大事であると次のように述べる。

「果シテ今日ノ教育世界ニハ猶道德門満ノ教員ニ乏シトスレバ道德教育ノ振ハザルハ教員其人ノ罪ニ歸セザルヲ得ザルナリ若シモ教員ニシテ道德門満ナラザルトキハ如何程善美ノ格言法語ヲ授クルモ死語ト一般ナルノミ是則道德上ノ格言法語ハ之ヲ使用スル人ノ品行如何ニ由リテ利器トモ為リ鈍器トモ為ル可ケレバナリ故ニ今日ニ際シテ道德教育ヲ振起スルハ宜シク教員ヲシテ社会ノ最優等ヲ占ム可キ道德神タラシムルヲ以テ最大急務ト為ス徒ニ其方法ニ使用スル器械ノ利鈍ヲ論ズル如キハ所謂枝葉ノ論ニ過ギザルナリ」<sup>04</sup>

要するに道德教育においては方法や技術よりも教師の人格如何が最も根本であると述べており、そうした教師への注視が、口授法否定論に帰結していくことになることは容易に想察しうることであろう。

さて明治20年代に入ると土方勝一による「口授法の得失」と題する論説が『東京若溪会雑誌』に掲載されており注目される。彼は先ず口授法を定義して、「茲ニ陳述セントスル口授法トハ単ニ彼ノ教科書ヲ講読スル法即チ講読法ニ対シテ下シタル名称ニシテ教師ハ前以テ教案ヲ綴リ問答ニ由リテ事柄ヲ授クルノミナラス兼テ文章ヲモ亦問答ニ由リテ作り之ヲ生徒ニ書取ラシムル法ヲ指シタルモノ」<sup>05</sup>と述べ、しかもここで特に論じようとするものは「其ノ数最モ多ク其ノ費用最モ少ナクシテ其ノ改良最モ困難ナル小学校ニ於ル口授法ノ得失」<sup>06</sup>であると前置きしている。

次に明治初期における口授法実施の状況を述べたあと、口授法の長所を列挙していく。先ず第1に「口授法ノ利タル一ニシテ足ラス教師ノ口頭ヨリ発スル音声ハ高低アリ緩急疾徐アリ活気ヲ吐キ活力ヲ顯ハシ壯快悦フヘク悲哀痛ムヘシ生徒ノ注意ヲ喚起シ智識ノ印象ヲ深フスル豈ニ紙面死字ノ比ナラシヤ」<sup>07</sup>（傍点引用者）と生徒の注意を惹き、印象を与える力は教科書法の比ではないとしている。第2に口授法のいわば総合教科的効用について次のように説く。

「其ノ問答ハ以テ生徒ノ心カト言語ヲ練磨シ心カノ強壯ヲ致シ能弁術ノ階梯トナリ其ノ問答シテ作所ノ文章ハ以テ作文ノ練習ニ供スヘク修辭ノ階梯トナルヘシ教師ノ口述ヲ傾聴スルハ注意ノカト聴覺ヲ練習シ其ノ筆記シタルモノハ作文ノ模範トナリ筆記ヲ清書スルハ習字ノ練習トナリ事実ト文字ノ連合ヲ鞏固ニシ讀書ノ補助トナル故ニ地理ノ一課ヲ学フモ其ノ実ハ身心ノ訓練ハ勿論讀書ナリ作文ナリ習字ナリ多少皆学ハサルナシ」<sup>08</sup>

さらに加えて、口授法は「教師ニアリテハ不完全ノ教科書ニ束縛サル、ノ憂ナク父兄ニアリテハ購得ノ費用ヲ要セス彼ノ漢学者ガ孜孜汲々ト四書五經ノ間ニ蟄居シテ其ノ範圍ヲ出ツル能ハス更ニ応用ノ道ナキト同日ノ論ニ

アラサルナリ」<sup>09</sup>という。以上挙げた諸々の理由から「排斥スヘキハ講読法ナリ採用スヘキハ口授法ナリ」<sup>04</sup>と断言する。

かく教科書講読法に対する口授法の利点、長所を縷々述べてきた土方は、ここで翻然、論を一転させ、かかる「口授法ノ如キモ欧米諸国ニハ可ナラン良教師ニハ可ナラン然レトモ欧米諸国ノ良教師ニ可ナルノ法必スシモ我邦現時ノ多数教員ニ可ナリト断言スヘカラス」<sup>10</sup>と述べる。そして「余輩モ口授法ノ有効ヲ信スル者ナリ然レトモ時ト所ニ由リテ其ノ有効ヲ信スル者ナリ如何ナル場合ニモ適用スベシト主張スル者ニアラス」<sup>11</sup>（傍点ママ）と口授法の適用は、時と所という条件によとし、その条件とは端的には「良教師」と「優待」の2事によると述べている。しかしわが国教師の現状から判断すると次の如く口授法は不適であると結論せざるを得ないとしている。

「扱現今多数ノ教員ハ善良ト云ヘル形容詞ヲ与フルニ足ルカ其ノ待遇ハ果シテ優待ト称スルニ足ルカ余輩ハ遺憾ナカラ否ノ一字ヲ呈セサルヲ得ズ」<sup>12</sup>

このように主として教員の現状という点から口授法の適用に否定的見解を述べた土方は、さらに同誌の69号に「口授法ノ得失 其二」と題してさらに教案作成、教員の知識、教授法、時間、費用といった諸点からも口授法否定論を導いている。

先ず教案について、口授法実践の前提条件として教案作成が必要となるが、その実状について「所謂教案ナルモノハ某書ノ写カ又ハ二三書籍ノツギハギタルぼろ案ナルコト已ムヲ得サル次第ナラン誤字脱文ノ散見スルモ余儀ナキ次第ナラン現今ノ教科書決シテ完全ナラサルモ吐嗟ノ間ニツギハギシタルぼろ案ニハ優ルヘシ」<sup>13</sup>と述べている。そして授業をはじめ教員間の交際、校舎の整備、校具、校簿の整頓等々極めて多忙な教員生活の現状において、立派な教案を作成する時間的余裕などあろうはずがないとも述べる。したがって教師の作成するような不完全な教案よりは教科書を使用の方がはるかにましであると結論づけている。

次に各教員の知識程度についても、「現在多数ノ教員ハ良教案ヲ綴ルノ知識アリヤ……八宗兼学ノ覚悟アリヤ各科ノ奥義ヲ極ムルノ能力アリヤ」<sup>14</sup>と指弾し、そうした教師による教授の実状についても次のように酷評している。「不良ノ教案ヲ手扣トシ不充分ノ用意ヲ以ッテ巧者ノ教授出来得ヘキヤ一言述ヘテハ教案ヲ見二口言フテハ黒板ヲ顧ミル様ニシテハ生徒ノ了解セサルハ勿論室内静肅ナル能ハサルヘシ焉ソ声音ノ高低アリ緩急疾徐アリ活気ヲ吐キ活力ヲ顯スヘキヲ望マンヤ生徒ノ注意ヲ喚起シ知識ノ印象ヲ深フスルヲ願フヘケンヤ」<sup>15</sup>

このように土方の論説においても教員の資質に関しての悲観的な現状認識が口授法否定に導く最大論拠になっていることが確認されるのである。しかしそればかりでなく口授法という方法自体に随伴している問題点の指摘もなされている。次の「時間」の問題がそうである。すなわち口授法は生徒の筆記を伴わねばならぬゆえ極度に時間を浪費するものであると言う。

「余輩ハ評シテ今ノ開発的教授法ハ児童ノ脳髓ヲ経済的ニ使用スルモ時間ヲ経済的ニ使用スル能ハサルナリト開発教授ノ利器タル口授法ニテ最モ時間ヲ費スハ筆記ノ一事ナリ……能ク実況ニ注意セヨ其ノ時間ヲ徒費スル驚クベク其ノ教授ノ迂遠ナル笑フベク甚シキニ至リテハ時間ヲ徒費スルノ一事ヲ以テ開発教授ノ奥義ヲ得タリトスル者アリ時間徒費ノ一事ハ教授ノ際ニ限ラズ其ノ前ニハ教案ノ草稿アリ其ノ後ニハ筆記ノ検閲アリ」<sup>98</sup>（傍点引用者）

当時の学事報告記事のなかにも「今日ハ格言書取ニ貴重ノ時間ヲ費シ修身口授ノ時間短キヲ以テ充分ノ評ヲ下スコ能ハス一言ニシテイヘバ作文書取ノ授業ノ如シ」<sup>99</sup>との記述がみられるが、口授という方法が格言の書取、筆記にかなりの時間を費やしていたことは事実のようである。同じ時期に「口授筆記法について」と題して寺田勇吉が論説記事を寄せているが、生徒の行っている口授筆記がいかに非能率的なものであるか、かつ身体衛生上もいかに弊害あるものであるかが詳述されている。<sup>100</sup>

土方の論説においては最後に「入費」、すなわち口授法支持の有力な根拠とされた経費節約という点に関して次のように述べられている。

「口授法ニ由レハ教科書購求ノ入費ヲ要セズ当今教科書ノ事ハ混雑醜声諸方ニ起リ亦如何トモスル能ハサルニ至レリ口授法ヲ採用スレハ右ノ困難ハ立ドコロニ消滅セン豈一大明策ナラスヤト余輩ハ首肯スル能ハサルナリ単ニ教育上ニ費ス金銭ノ高ヲ減シサヘスレハ改良ニ赴キタルナリトハ思ハス……如何ニ教科書ノ入費ヲ減シタリトテ今ノ教員ノ有様ニテハ口授法ハ到底有害無益ナリト定マラハ決シテ明策ニハアラサルヘシ」<sup>101</sup>

つまり教育方法の採否は、ただ経済性のみで判断すべきでないとし、「以上述フル所ニ由リテ口授法ハ決シテ得策ニアラサルヲ信ス」<sup>102</sup>と全体の結論を下しつつ、しかしさればとて「天保ノ昔日ニ立チ帰り経書講釈ノ法ヲ回復センカ是レ亦明策ナラサルヲ知ル」<sup>103</sup>とも言い添えている。

以上みてきた如く口授法否定論は、口授法が方針とされた森文政期も挟んで明治10年代から20年代にかけて展開されたのであるが、特に明治23年（1890）の「教育勅語」公布前後に一層の昂まりをみせることになる。例え

ば明治23年（1890）3月刊の雑誌『教育』に掲載された論説「修身教授ノ弊害ヲ論ズ」は、口授という方法自体の弊害、実践の実態に対する批判がなされているという点で特徴的である。

すなわち先ず、3～4年前の明治10年代（改正教育令期）と比較し現今においては修身科の教授法もかなり進歩し、「論語ノ講義修身書ノ読講等ノ如キハ如何ナル山間僻地ト雖モ自下地ヲ払テ其跡ヲ見ザルニ至レリ」<sup>104</sup>と森文政期における講読法から口授法への推移状況が述べられる。次にその口授法であるが、確かに生徒の感情を喚び起こし、感動に訴えることにより徳性の涵養を期し得る最も有効な方法であることは認められるが、それがゆき過ぎてまさに感情一点張り、感情至上主義となり、またあまりに技巧に走り過ぎて弊害を醸し出している状況が次のように述べられている。

「然レトモ退イテ其内情ヲ洞察スレバ実に慨歎ニ堪ヘザルモノ無キニ非ズ何ゾヤ口授ヲ起ル所ノ弊害是ナリ蓋シ口授ノ法タル教師ハ務メテ生徒ノ感動力ヲ引キ起スニ足ル所ノ談話ヲ為シ悲壯ノ処ハ悲壯ノ声ニテ之ヲ話シ雄威ノ処ハ雄威ノ音ニテ之ヲ述べ務メテ語調ヲ変ジ巧ミニ音声ヲ換ヘ生徒ヲシテ修身口授ノ快味ヲ覺エシムトカ徳性ヲ涵養スルトカ甚六ヶ敷ハ方今教育社会一般ノ与論ナルガ如シ思フニ此方法タル実ニ修身口授ノ一大用具ナルベシト雖モ其方針ハ傾向シテ漸次感動ノ一点ニノミ傾キ此教授ハ巧ミナレトモ生徒ハ感動ヲ起スコ充分ナラズ彼教案ハ可ナレトモ生徒ヲシテ感動力ヲ起サシムルニ足ラズト此モ感動彼モ感動ト修身ノ教授ハ殆ド感動ノ一点ニノミ在ルガ如ク其極点逐ニ論語ノ講義ニ修身書ヲ読講スルヨリモ甚シキ弊害ヲ現出セリ豈ニ亦教育社会ノ為メニ慨嘆セザルベケンヤ」<sup>105</sup>（傍点引用者）

以上、明治10年代以降展開されてきた口授法批判について考察してきたが、そうした口授法批判論の展開が、明治24年（1891）における口授法から教科書採定への方針転換の有力な背景ないし媒介になったであろうことは決して否定出来ないであろう。

## 2. 西村茂樹の修身教科書論とそれをめぐる若干の論争 ——明治23年末～24年初頭——

口授法から教科書採定への方針転換については、口授法に対する否定論、批判論の展開が有力な背景、媒介をなしたことは今指摘したところであるが、それと併行して教科書必要論、有用論も抬頭しつつあった。先述の普通学務局長「通牒」の「説明」においては、教師の資質の問題に続いて教師が教授の際抱るべき指針として（教育勅語に準拠した）教科書の必要性が次の如く強調され

ていた。

「抑モ修身科教授ノコトタル教員躬自ラ実践履行シテ模範トナルヘキハ勿論ナリト雖モ適当ノ教科書ヲ用ヒサルトキハ教員各其偏スル所ニ詳ニシテ他ヲ略スル等ノ弊ニ陥リ其説ク所往々道德ノ全体ヲ尽サス甚シキニ至リテ其方針ヲモ誤ルモノナキニアラス故ニ勅語ノ旨趣ニ基キ人道実践ノ方法ヲ教示スルニ適当ナル図書ヲ選定シテ復前述ノ憾ナカラシメ教員ノ薫陶ト相待チテ好果ヲ取メンコトヲ期ス是レ本牒ヲ発シタル所以ナリ」<sup>44</sup>

かく教科書を選定するも「教員ノ薫陶ト相待チテ好果ヲ取メ」<sup>45</sup>ることが必要なものであり、教科書を使用するからといって「誦読ヲ主トシテ実行ヲ忽ニスルカ如キコトナカラシメンコトヲ要ス」<sup>46</sup>との注意が添えられている点は注目する必要がある。

こうした教科書必要論は「教育勅語」公布直後より顕著となるが、そのひとつとして西村茂樹が明治23年（1890）12月『教育時論』に寄せた「修身教科書ノ説」が特に注目される。西村の経歴については前稿<sup>47</sup>でも述べたが、明治10年代（改正教育令期）のいわゆる儒教主義復活期に教科書編輯局長として修身教科書の編集に尽力していた彼は、森文政期においては、反儒教主義者である森文相との思想的確執等から編輯局長の座をはずされていた。その彼が「教育勅語」公布直後に上記の如き論説を発表していることは、いかにも時代の推移を象徴する出来事と言うべきであろう。

さてその論説のなかで西村は先ず、森文政期における口授法に対し「余ハ此説ニ同意スルヲ能ハズ」<sup>48</sup>と述べ、兼ねてよりの持論である教科書の必要性、有用性を6点にわたって主張している。先ず第1には「世界何レノ国（文辞ノ通ゼザル国ト、野蛮ノ国ハ之ヲ除キ）ニモ德育ヲ為スニ經典ヲ用ヒザル者ハアラザルベシ」<sup>49</sup>と諸外国の状況を述べている。「經典」という表現自体にも西村の教科書観、書物に対する神聖観が表われていると言えよう。第2に教師の年令要件について西村は、修身の教授は道德上自得ある者でなければ適わず「如何ナル才子ニテモ若年ニテハ之ヲ得ルヲ難シ」<sup>50</sup>という。しかるに「今日小学ノ教員ヲ見ルニ、三十以下ノ人甚多ク、其学問モ恐クハ致知格物誠意正心ノ学ヲ為シタル者ニハ非ザルベシ。此ノ如キ教員ニ、其身ヲ以テ生徒ノ模範タランヲ望ムハ、甚ダ無理ナルヲナルベシ」<sup>51</sup>と断じている。いかにも“老儒”といった教師像を窺わせるものと言えよう。第3に知識の正確な伝達という点からも口授法は特に小学校段階では不適であるという。すなわち「小学校ニテハ生徒年猶幼ナルヲ以テ、教員ノ口授ニ少シク入込ミタル所アレバ、輒モスレバ其義ヲ聞誤マルヲナリ、教員モシ其土地ノ人ニ非ザルトキハ、其言語ノ異

ナルヨリシテ此弊殊ニ甚シ」<sup>52</sup>と述べる。第4に、「人ニハ耳目ノ両官能アリテ、諸学科（音楽ヲ除キ）皆耳目ノ両官ヲ用ヒザルハナシ。然ルニ殊ニ大切ナル德育ニ限リ、何故ニ目ヲ廢シテ耳ノミヲ用ヒントスルカ。」<sup>53</sup>と、耳目両感覚の利用という点からも、視覚に訴える教科書の重要性を強調する。この論点は明治10年代にはみられなかった新しいもの、として注目されよう。第5には記憶という点である。すなわち「何レノ学科モ其要点ハ常ニ生徒ノ記憶ニ留存セシメザルベカラズ、修身ノ学科ハ最も大切ナル者ナレバ、人間必要ノ訓誨ハ必ズ生涯生徒ノ腦中ニ鐫刻セシメザルベカラズ、口授ノミノ教授ニテハ、決シテ此目的ヲ達スルヲ能ハズ」<sup>54</sup>と「人間必要ノ訓誨」（格言）の記憶という点でも口授法では不充分であるとしている。これはまさに西村がかつて強調していた「熟読暗記」（『小学修身訓』『凡例』）の教育方法論そのものであると言うことが出来る。最後に、「教育勅語」公布という時期に照応して、教訓の統一という観点から教科書の必要性を次の如く強調する。「現今ノ如キ教育社会ノ有様ニテハ、道德ニ付キ人人ノ信ズル所、十人十様ナリ、……学校ニ一定ノ經典ナク、カカル教員銘銘自己ノ信ズル所ヲ以テ生徒ニ口授セバ、其結果イカン、智者ニ非ズト雖トモ、其不可ナルヲ知ラン。」<sup>55</sup>この主張は、先述した「……殊ニ修身ニ於テ多数ノ教員ノ腦裏ニ一任シテ教科書ヲ定メサルカ如キハ其当ヲ得サルモノトス」<sup>56</sup>との明治24年（1891）11月17日の大木喬任文相の文部省訓令第5号の趣旨と全く同様のものと言えよう。以上挙げてきたようないくつかの理由から西村は「余ハ小学中学ノ德育ニ、必ズ教科書即チ經典ヲ用ヒザルベカラザルヲ自信セリ」<sup>57</sup>と結論を下しているのである。

ところでこの西村の修身教科書必要論に対して、早速に明治24年（1891）1月発行の『教育報知』に「西村君ノ修身教科書説ヲ読ム」と題する清水直義の反論が展開されている。この論説で清水は、西村の修身教科書必要論6点のひとつひとつに対して反論を述べている。先ず第1点「世界何レノ国ニテモ德育ヲ為スニハ經典ヲ用フ」<sup>58</sup>との諸外国の例示に対しては、「何レノ国」といってもわが国のみは例外であること。すなわち「何ソ必シモタマ世界何レノ国モノ為ス通リニ為サルヘカラストスルノ要アラナヤ、我国現今ハ蓋コノ事情ヲ許サルモノトス。」<sup>59</sup>と反論している。「事情」とは恐らく一神教的様相の強い西洋諸国と比して、それとは対照的なわが国の宗教事情を示唆していると言えようか。第2点、教員の年令、資質の問題については、確かに説の通りであろうが「タマ通常不品行ナラサルモノタランコトハ何モ自得ノ何ノト左程六ヶツク考フヘキコトニアラサルニ於テオヤ。」<sup>60</sup>と、それほど神経質に考える必

要はないと反駁している。第3点、生徒の聞取りは口授法のみならず「教科書ヲ用ヒテ講義スルトスルモ亦同様ナランノミ、而シテ真正ノ教授法ニ拠リテ教授スルトキハ聞取スルナトノ心配ハ之ナキモノナリ」<sup>20</sup>と反論するのみか、逆に「聞取スルナトノコトハ所謂蛙鳴蟬噪、換言スレハ漢学者流ノ教授法ニ付帶セルノ弊風ナリト云フヘキカ。」<sup>21</sup>と「漢学者流」の旧教授法をこそ批判しているあたり、いかにも「開発主義者」たる彼の面目が窺えるところと言えよう。第4点、耳目両感覚を利用すべきとの説に対しては、「口授ニテ修身教授ヲ為スモノ豈タ耳ノミニ拠ランヤ、若シソレ少シク行届キタル修身教授ノ席ニ臨マハ意味ナキ難読ナル文字ノ行列ニ後レル面白キ美麗ナル実物、若シハ図画等ノ能ク活用セラル、ヲ見得ルナルヘシ」<sup>22</sup>と、口授法においても掛図など視覚に訴える実物の活用がなされている実状を述べている。第5点、「口授ノミノ教授ニテハソノ要点ヲ生涯生徒ノ腦中ニ鐫刻セシムルコト能ハス。」<sup>23</sup>との西村の説に対しては、むしろ口授による強い感情の喚起こそ記憶を確固たらしめる最良法であると次のように述べている。「教科書ヲ繰返々々復習センメ之ヲ銘記セシメントスルコトハ強キ感情ヲ起サシメ自ソノ腦裡ニ存セシムルコトニ及ハサルコト遠カラシ、而シテコノ後者ノ如クセントスルニハ口授却リテ教科書ヲ用フルニ後レリ。」<sup>24</sup>この点こそ西村の教育方法論との顕著な相違点であると言えよう。最後の「道德ニ付キ人々ノ信スル所異ナル故難読ノ弊ヲ生セン」<sup>25</sup>との説に対しては、「教科書ヲ定メタリトテコノ弊ハ必シモ去ルモノト為スヲ得ス、要スルニコレ別問題ナリトス。」<sup>26</sup>とかわしている。

以上、6点にわたる西村の教科書必要論のひとつひとつに対して反論を展開した清水は、さらに修身教科書論とも言うべき第1の論点に対して詳細に反論を試みている。先ず第1に西村は、修身教科書の要件として「其一、其国ニ於テ千年以上ノ星霜ヲ経タル者。其二、其書ノ力ニ依リテ幾千万ノ国民ノ道德ヲ鎔成シタル実効アル者。其三、一タヒ其名ヲ聞ケハ国民大抵其如何ナル書ナルコトヲ知り得ル者。其四、数百年來其書ヲ以テ其国ノ治乱興廃ノ鑑トシタル者。」<sup>27</sup>の4点を挙げている。それは例えばキリスト教における聖書（バイブル）、仏教における經典の如き、要するに永遠なる普遍的指針を教示する類いの書物と言えよう。そうした西村の修身教科書論に対して清水は、「如此書ハソノ当時ニ在リテハ実ニ有用ナル尊重スヘキモノナリシニ相違ナシト雖、……決シテ今ニ猶ソノ有用ナル性質ヲ存セリト為スヲ得サルナリ」<sup>28</sup>と、そも教訓や指針の時代を超えた普遍的妥当性自体に疑念を呈している。

第2に西村の指示する修身教科書が儒教中心であるこ

とに対し、それは中立性を欠くことではないかと次の如く批判している。「次ニ君ハ論孟學庸ヲ取りテ修身教科書ト為ヲ可トシテ、可蘭新約全書等ノ偏スルモノ、哲學哲學ヲ修身教科書ト為サンカト比較セテハハストセラレタリ、余ハ恠ム君ハ何故ニ神仏兩道ニ比較シラレサリシヤ、世人或ハ君ヲ亦ソノ好ムスルニ僻スルモノトスルモ止ヲ得サルヘキカ。」<sup>29</sup>

以上の批判は、修身教科書の性質、内容、道德理念に因してのものと見えようが、清水はさらに、西村のいわゆる「読書百遍意自ずから通ず」式の方法論に対しても次のように手厳しく批判している。

「君ハ或人ノ難ニ答ヘテ曰、小学ノ生徒ニハ其文ヲ暗記セシムレハ可ナリ、敢テ其義ヲ會得セシムルヲ要セス、……年長スレハ自然ニ其義ヲ會得スルコトヲ得ヘシト、コノ説ハ換言スレハ小学生徒ニハ修身教授ヲ為サシテ可ナリト云フニ異ナラス、蓋左

意味ナキコトノ暗記……十五歳以下……学齡

右ヲ自理解スヘシ……十七歳以上

図ノ如クナルヘケレハナリ。然レトモ今仮ニ之ヲ不可ナラストスルモ、教授法ノ学理ハ決シテ如此コトヲ許サルヘシ、余ハ君ノ高説トシテ之ヲ知ルコト久シケレトモ、如何ニ熟考スルモ未ソノ可ナルヲ知ルヲ得ス、但若シモ言文一致ナルカ或ハ殆然ルカノ国ニ於テハ君ノオ説モ大ニソノ理アリトスレトモ、我國ノ如キニ於テハ実ニソノ意ヲ知ルニ苦ムナリ。」（傍点引用者）

近世においては藩校や私塾等の教育方法は漢書の素読が中心であり、西村の主張する如き教育方法観が支配的であったと思われる。したがって西村の主張も、自らの青少年期における体験の中で培われたものと言えよう。そうした西村の教育方法論を清水は、近代的な「教授法ノ学理」に反すると批判したのであった。同様の批判は、清水以外の人物によってもなされている。例えば雑誌『国家教育』には林吾一なる人物が「西村茂樹先生の修身教科書の説を読む」と題して以下の如き論を展開している。

先ず西村が修身書として『論語』を推挙している点、さして異論はないとしつつも、文章の難解さを指摘し「余も或人の如く論語の書は其意味深長にして且原語漢文なれば児童をして之を誦読せしむるは頗る難く其意義を解せしむるは更に難し是小学校の經典を用ひ難き所以なりと難せざるを得ざるなり」<sup>30</sup>と難じている。

次に西村の、「小学の生徒は其文を暗記して遺忘せざれば足れり敢て其義を會得することを須ひず」<sup>31</sup>との説に対しては次の如く反論している。

「夫れ児童をして聖賢の格言を記憶せしむる幾万言を重ぬと雖も之を理解せし以上にあらざれば更に感動せし

むるの力なく感動せしむるの力なき者は亦感化せしむるの力なきなり然らば西村先生の考案は維新以前の教育に四書を誦読せしめたと同様に読書上の利益は兎も角も徳性を涵養するの功は頗る疑ふべきが如し」<sup>40</sup>

理解の伴わない記憶は、感動も感化も生ずるわけがなく徳性の涵養にもならないと述べる。林はさらに、行為を習慣たらしめる「狭方」こそが徳性涵養に直結した方法であると次のように述べる。「……幼稚の間に於て善を勧め悪を懲さんとせば父母教師は理屈よりも寧権力を以て之を矯正し強て法度の外に逸出せざらしむ是れ所謂狭方にして恰も仕立上げたる衣服に仕付を施せるが如く終に其行為をして習慣とならしめて後止むなり」<sup>41</sup>

以上の如く西村の修身教科書論をめぐって展開されたこの論争は、いわば教科書・教育方法論争と言えようが、なお言えばこの論争は、明治20年代後半に華やかに展開されるところの生徒用教科書の要不要、教科書の生徒所持の可否をめぐる論争の萌芽という要素も有していたとみることが出来る。すなわち種々の点にわたり西村の説に反論を展開していた清水は、最後に結論として次の三項を挙げていた。

- 「(1)修身教科書ハ有要ナリ。但師中兩校ハ生徒用。小学校ハ教員用。  
(2)同書ハ儒道ト西洋倫理説トヲ折衷シ今ノ世徳ニ適スルモノヲラシムヘシ。  
(3)同書ハソノ語句ヲ成ルヘク簡易ナラシムヘシ。」<sup>42</sup>

すなわち教科書講読法に対し口授法の利を主張した清水であったが、(1)にあるように教科書の有用性ということは基本的には認めているのであり、その点では西村と意見を異にするものではなかったと言えよう。そしてその教科書のあり方については(2)、(3)にあるような要望を述べるとともに、特にここで注目されるのは(1)の但書である。すなわち師範学校や中学校といった中等学校段階においては生徒用教科書が必要であるとしながらも小学校においてはただ「教員用」とのみ記していることである。つまり清水は、小学校においては教師が教科書を用いて教授すべくも、生徒各自が教科書を所持する必要性までは考えていなかったと思われる。それに対して教科書の熟読、記憶を重視していた西村にあっては、当然生徒各自が教科書を所持することを必要と考えていたであろうから、小学校における生徒用教科書の要不要という点において両者は見解を異にするものであったと察することが出来るのである。

次節で考察するように明治24年(1891)12月に制定される「小学校修身教科用図書検定標準」において修身科教師用書・生徒用書の制度的成立をみることになるが、以後そのことの意義、解釈をめぐっての論評、さらには教科書の生徒所持の可否をめぐっての活発な論争が展開

されることとなる。上述の明治23年(1890)末から24年初頭にかけて修身教科書論をめぐって西村と清水の間で展開された論争は、そうした論争の端緒として位置づけることも出来るであろう。

### 3. 教師用書・生徒用書の制度的成立とその意義をめぐる論議

「学制」期においては、明治5年(1872)の文部省創定「小学教則」においても翌6年の師範学校創定「小学教則」においても各教科毎に使用すべき標準教科書が掲記されていたが、それらはいわば教師の「講述用参考書」といった類いのものであり、必ずしも生徒各自が所持すべきものとはされていなかった。明治10年代の「改正教育令」期においては誦読、口授の併用という教育方法と関わって、修身科教科書も「嘉言」中心の誦読用教科書と「例話」中心の口授用参考書という具合に区別的に編集される傾向がみられたが、これは生徒用書と教師用書の分化的成立の兆しとして注目される。<sup>43</sup> 森文政期においては口授法が採用され、基本的には教科書は用いない方針であったが、この時期に刊行された修身教科書のなかには事実上教師用書と生徒用書を区別して編集されたものもあった。<sup>44</sup> このような前史を踏まえて第2次小学校令下の明治24年(1891)12月17日には「小学校修身教科用図書検定標準」が公布され、これによって教師用書と生徒用書の制度的成立がみられることになる。そしてそれに関する論評も行われている。

#### (1) 「小学校修身教科用図書検定標準」(明治24年12月)をめぐる論評

「小学校修身教科用図書検定標準」(以下「検定標準」と略記)は、修身科教育が教科書を採定する方針をとり、検定制が適用されるようになったのに伴い、その「検定標準」を公示したもので次の7項からなる。

- 一、修身教科用図書ニ掲載セル事項ハ小学校教則大綱第二条<sup>45</sup>ノ要旨及程度ニ適合センモノタルヘシ
- 二、修身教科用図書ハ教師用ト生徒用トノ二種ニ区分シ教師用ノ教科用図書ハ生徒用ノ教科用図書ヲ教授スルニ適當セルモノタルヘシ
- 三、修身教科用図書ハ高等小学校用尋常小学校用ノ二種ニ区分シ高等小学校ニ於テハ成ルヘク男女生徒用ヲ分チタルモノタルヘシ但男女児ヲ同一学級ニ編制セル高等小学校ニ適用セントスル教科書ハ男女生徒用ヲ分タサルモ妨ケナシ
- 四、修身教科用図書ニ掲載セル事項ハ各学年毎ニ成ルヘク道徳ノ全体ニ渉リ学年ノ進ムニ從ヒ漸次易ヨリ難ニ

進ミタルモノタルヘシ

五、修身教科用図書ニ掲載セル例話ハ成ルヘク本邦人ノ事蹟ニシテ勸善的ノモノタルヘシ

六、生徒用ノ修身教科用図書ノ文章ハ簡易ニシテ児童ノ読書力ニ相応セルモノタルヘシ

七、修身教科用図書ノ挿画ハ鮮明ニシテ道德涵養ニ裨益アルモノタルヘシ<sup>93</sup>

この「検定標準」についてはいくつかの論評が当時の教育雑誌に掲載されているが、第二項の教師用書・生徒用書の成立意義に関する問題が主要な論点となっているようである。以下例示してみることにする。

先ず「検定標準」公布直後の『教育報知』294号に「小学校修身教科用図書検定標準公示に付一言」と題する短い記事が掲載されている。そこでは最近、恰も文部省が修身教科書を編纂するかの如き「浮説」が巷間に流れているがそれは誤解であって文部省の意図はあくまでも民間において教科書を編纂させるべく、その「便益」のために今度「検定標準」を公示するに至った経緯が先ず述べられ、次に修身教科用図書を教師用と生徒用の2種に区分したことについて「或は議論する者あるへく又は誤解する者もあるへし」<sup>94</sup>と懸念をみせつつも、その意義について次のように述べている。

「若し能く修身科の性質を知り其勸誡の方法を悉せる者ハ容易に此二種の必要あるを知るべく従ふて此教師用なるものハ彼の他学科に於ける参考書の類と異なりて教師ハ是非共之に依り修身科の勸誡を為さるへからざるものなることを解し得へし」<sup>95</sup>

このように教師用と生徒用の2種が必要なことを述べつつも、特に教師の「勸誡」の拠りどころとして教師用書の重要性を強調していることが特徴として窺い得よう。なおこのことは同時期の他の論評等にも共通しているようである。

例えば明治24年(1891)12月刊の『教育報知』295号には「小学校修身教科用図書検定標準ヲ評シテ教科書事業ニ及ブ。」と題する論説記事があるが、第二項の教師用書と生徒用書の区分について「吾儕ノ大ニ賛成スルコロナリ」<sup>96</sup>と賛意を呈したあと、その理由について次のように述べている。

「蓋シ修身ノ事タル他ノ学科トハ大ニ異ナルトコロアリ、一言一句ノ間一挙一動ノ際ト雖モコノニ大ナル関係ヲ生スルモノナレハナリ、然ルヲ以テ生徒ニ其教科書ヲ持タシムルト否トニ拘ハラズ、充分ニ完良ナル一書ヲ編ミ教師ヲシテ是非ニ此書ニ依リテ教授スルコト、為サンメサルヘカラス、之ヲ要スルニ此科ノ性質ヨリ此科勸誡ノ方法ヨリ斯カルヘカラサルヲ信セシムルナリ、況ンヤ斯クスルトキハ生徒用教科書ヲシテ能ク児童ノ知力ニ相

応セシム得ヘキノ大利益アルニ於テオヤ。」<sup>97</sup> (傍点引用者)

すなわち修身科の「勸誡ノ方法」の特質から、教師が教授上の拠り所とすべき教師用書(「完良ナル一書」)が、生徒用書の使用不使用に拘らず、また生徒用書をして「能ク児童ノ知力ニ相応セシム」るためにも是非とも必要であると述べている。「生徒ニ其教科書ヲ持タシムルト否トニ拘ハラズ……」との字句にも窺えるように教科書の生徒所持ということは当初は必ずしも重要視されていなかったものであり、とにかく教師用書の必要性和重要性とが強く認識されていたのである。なお第三項以下については若干の異議をさし挟みつつも基本的には賛同の意が示されている。<sup>98</sup> また同雑誌同号には「修身教科用図書検定標準ニツキテ」と題する太田政徳によるかなり長文の論説も掲載されている。そこでは先ず第一項の、修身教科書は「教則大綱」の趣旨に沿って編纂すべきことについては「言ヲ俟タサルナリ」<sup>99</sup>と述べたあと、特に第二項の教師用書・生徒用書の成立意義について以下の如く詳述している。

「修身教科用図書ヲ生徒用教師用ノ二種ニ分ツノ必要アル所以ノモノハ畢竟生徒用修身教科書ハ尋常小学校ノ第一年ノ児童ノ如キ読書力ノ乏キ者若クハ其他ノ児童ニ於テモ事情ニ依リテハ之ヲ用ヒシメサル場合ナキヲ保セス此場合ニ於テ教師用ノ修身教科書ナキトキハ教授ノ事項ヲシテ単ニ多数教員ノ腦裏ニ一任セサルヘカラス」<sup>100</sup>

すなわちひとつには尋常科1年など生徒用教科書を必ずしも使用しない場合、教師が拠るべき指針として教師用教科書が不可欠であると述べる。教授事項を「多数教員ノ腦裏ニ一任」すべきでないという趣旨は、24年(1891)11月の文相「訓令」と全く同様である。

次に尋常科2年以上で生徒用教科書を用いる場合は、記述の極めて「簡単」な生徒用書を敷衍化するために教師用教科書を別箇に編纂し使用することがやはり必要であると次のように述べる。

「又仮令教科書ヲ携帶セシムルモノトスルモ其掲載セル事項ハ甚タ簡単ナルヘキモノナレハ之ヲ教授シテ明瞭ニ理会セシメンニハ適當ナル引例事實等ヲ示サ、ルヘカラス而シテ教師用教科書ナキトキハ亦コレヲ取捨選撰ヲ一ニ教員ニ委セサルヲ得ス加之適當ナル実例引証等ヲ選撰センニハ善良ナル多クノ参考書ヲ繕キテ穿鑿スルノ勞ヲ取ラサルヘカラス然ルニ現今多数ノ小学校ニ於テ十分ニ参考書ヲ備フルノ資力アルモノ果シテソレ幾何カアル仮令コレアリトスルモ数多ノ書冊ヲ繕シテ計較参照最モ適當ナル者ヲ検出スルコトモ亦容易ノ事ニアラストス故ニ是等ノ危険ト困難トヲ避ケシメンニハ生徒用修身教科書ノ外ニ教師用修身教科書ヲ要スルハ当然ナリト謂フヘ

シ」<sup>88</sup>

生徒用教科書を敷衍化すべき教師用教科書は、適切な「実例引証」を中心に編集し教授の便に供すべきもので、その点では従前（改正教育令期）の口授用参考書と類似の性格のものであるが、しかし従前の口授用参考書と今度の教師用書との相違に言及して次のように述べている。

「抑モ教師用修身教科書ハ従前称スル所ノ教師用参考書トハ其性質自ラ異ナルモノニシテ単ニ参考書ト云ヘハ其区域際限ナキモノナレトモ標準ニ所謂教師用修身教科書トハ諸般ノ事情恰モ生徒用ノ教科書ニ伴ヒ生徒用教科書ヲ敷衍シテ教授スルニ最モ適合セル唯一ノ図書ヲ指シタルモノナリト云フ」<sup>89</sup>（傍丸ママ）

すなわち教師用教科書とは生徒用教科書を敷衍化して教授する際の拠り所となるべき「唯一ノ図書」であると言うのである。なおこの論説では「検定標準」の第三項以下についての論評も展開されているが、<sup>90</sup> 本稿では特に第二項の教師用書と生徒用書の制度化の意義、解釈に焦点を絞ってみてきたわけである。要約すると修身科教授において、教師用と生徒用の2種の教科書の必要性を認めつつも、特に教授の拠り所としての教師用教科書の重要性が、生徒用教科書の使用不使用に拘わらず、また使用する場合はその敷衍化のために必要であると認識され強調されていた。すなわち教師用教科書にウェイトがおかれていたと言える。

ところでこの教師用書・生徒用書の問題は、「検定標準」以前の明治24年（1891）10月7日の普通学務局長「通牒」をめぐる論評においても、すでに問われつつあったのである。すなわち「通牒」の指示する教科書の採択、一定化の方針を教師用書、生徒用書のいずれのレベルで捉えるかという問題である。時期的には前後することになるが次に普通学務局長「通牒」をめぐる論評について考察したい。

## (2) 普通学務局長「通牒」（明治24年10月）をめぐる論評

口授法から教科書採定への方針転換を最初に明示した普通学務局長「通牒」については、抑々その方針自体に対する賛否両論が噴出している。「通牒」公示と同月に刊行された『教育報知』286号には、「賀普通学務局長之通牒。」と題する三刀谷扶綱の記事が掲載されている。標題が示すとおり、「通牒」の方針に賛意を示す論者は、自らを元来教科書必要論者であると称しているが、賛成の論拠については「嘗て某雑誌に於て論じたことあり」<sup>91</sup> としてその大要を抄録している。内容からそれは『東京茗溪会雑誌』に掲載した「倫理ノ教授ハ教科書ニ

ヨルカ或ハ口授ノミナルカ」と題する論説であることが確認される。その内容についてはのちにも触れるので詳しい紹介は省くが、要するに教師に徳望あって、演述の順序、言語の抑揚、感情の発表等巧みで恰もその人物の精神より湧出する如くであれば口授法の効能これに勝るものはないとする。一方教科書を採用するときは生徒に対する徳教の感情は口授ほど強くはないが、方法的に容易で全国大多数を占める「庸劣の教師」にも可能ないし適当である、という論旨である。<sup>92</sup>

このように「通牒」の教科書採定の方針を支持する記事がある一方、同じ『教育報知』の次号（287号）には「吊普通学務局長之通牒。」との見出しによる批判記事が掲載されている。「近時教育ノ趨勢甚タ怪訝ニ堪ヘサルモノアリ、文部省普通学務局長カ過日各府庁ニ対シテ発シタル通牒ノ如キ其一ナリ、」<sup>93</sup> との書き出しで始まるこの論説では、「小学幾万ノ教員諸氏、試ニ虚心平氣此通牒ヲ翫味セラルヘシ。此通牒ハ諸氏ノ活力ヲ以テ明ニ教科用書ノ死物ニ劣レリトナスモノナリ。」<sup>94</sup> と全国教師に発憤を促がしている。この叙述からも察せられるように、この論説の趣旨は、「通牒」が指示するような教科書採定＝口授法否定論は、あまりにも教師の資質、その現状を低く侮っているものであると憤慨している。そも論者（はた生）によると、教育において最も重要な、中心となるべきものは教師なのである。すなわち、「小学教育ニ従事スルモノニシテ、其感化力能ク生徒ノ徳性ヲ養成スルコト能ハサルモノハ、既ニ教員タルヘキ資格ヲ失シタルモノ」<sup>95</sup> と言うべきであって、「若自己ノ力ニ依リテ善良ノ徳風ヲ養成スル能ハサルモ、之ニ教科図書ノ善良ナルモノヲ持タシムレバ、以テ其人ノ不足ヲ補フニ足ルトナスモノ」<sup>96</sup> の如き、極めて浅薄なる議論であると断ぜられることになる。結局「通牒」は「小学教員ヲシテ其勢力ノ如何ニモ微弱ナルコトヲ、世間ニ発表スルノ外、何タル効益ナキモノ」<sup>97</sup> と批判されることになる。

要するに本稿第1節でも考察したように、口授法否定論が、教師の資質の現状についてのかなり悲観的認識に立って、そうした教師の現状に即応ないし追従しようとするところから出てきたものとすれば、この論者は何よりもそうした教師の資質の向上こそが最緊要であると考えていた、とみてよいであろう。したがって「若今日ノ教師ヲ疑フテ、口授法ヲ用キシメサレバ、何日マテ待テ之ヲ用キシメントスルヤ。」<sup>98</sup> と反論する。そして口授法否定論者の如く教師の現状に即応するばかりでは一向に事態の改善がはかり得ないばかりか、教科書法は「動モスレバ教員怠慢ノ媒介トナリ終ルノ傾アリ。」<sup>99</sup> とも述べ、その事情について次のように説明している。

「即教員ハ授業前ニハ少シク準備ヲナス、教場ニ臨ミテ初メテ書籍ヲ開キ、巻葉若クハ二葉ヲ読ミ終ラシムルノ後、其紙ヲ二重ニ折り置キ、次回ノ修身時間マテハ、一先ツ安心ト言ハシムルニ至ルヘケレハナリ。故ニ怠慢ノ教員ニ取リテハ教科書ニ由リ教数ヲ逐フテ進マシムル程、難有キ事ハナシ。余輩ノ如キモ此法ニ依レハ、日々幾時間授業ヲナシテモ毫モ疲労セサルヘシ。」<sup>40)</sup>

このように教科書法は教師の資質を一層低下させる結果になりかねないと危惧しているのである。結論として論者は、「従来教科書ヲ採用シタルモノヲ、今日ヨリ採用セサルコト、ナスコト、理ノ当然ナルヘキニ、今之ヲ転倒セントスルカ如キハ、余輩ノ不肖ナル毫モ其理ヲ見出スコト能ハサルナリ。」<sup>41)</sup>と、すなわち「通牒」の方針はまさに時代逆行であると批判しているのである。このように普通学務局長「通牒」をめぐるのは賛否両論が噴出し、上述の如き批判論もみられたのではあるが、やゝ理想論的傾向をもった批判論は低調で、現状即応論的な教科書採用論の方が大勢を占めていたと言える。また「教育勅語」の公布という状況も、教科書必要論を促す有力要因であったと言うことが出来よう。

ところで「通牒」の示す方針自体についての論評もさることながら、ここで特に注目しなければならないことは、「通牒」の指示する教科書採定の方針について、教師用書・生徒用書の制度化との関連でどう解釈すべきであるかが問われつつあったことである。上述の論説には「教室子」による論評が付されているが、そのなかに次の叙述があった。

「又曰ク文部大臣カ普通学務局長ヲシテ各府県知事ニ通牒セシメタルハ修身教科用書ヲ採定スルヲ要ストノコトノミ勿論既ニ教科用書ヲ採定ストナシタル以上ハ之ヲ生徒ニ持タシムルカ為ニスルモノナリト推測セラレ得サルニアラサレトモ又一方ヨリ考フレハ同大臣カコノ処置ニ出ラレタルハ只熱心ニ我邦道德ノ前途ヲ憂慮セラレタルニアレハ必シモ生徒ニ之ヲ持タシムルヲ可ナリトスルモノニモアラサルヘシ」<sup>42)</sup>（傍点・傍丸ママ）

「教室子」自身は、「通牒」にいう教科書採定は、主として教師用書のことを念頭においているのであって生徒用書ないし教科書の生徒所持というところまでは規定していないと解釈していたようである。したがって続けて「余ハ望ム大臣カコノ処置アリタル結果トシテハ各府県ニ於テ修身教授用書即教員ノ教科用書ヲ定ムルヲトナランコトヲ」<sup>43)</sup>（傍丸ママ）と要望を述べている。

「通牒」の示す教科書採定の方針が教師用書についてのものなのか、生徒用書も含めてのものなのか、「通牒」自体は「採定さるべき教科書の教師用・生徒用の区別を明らかにしていな」<sup>44)</sup> かなかっただけに、その解釈がひとつ

の論争点ともなっていたわけである。例えば明治25年（1892）4月刊の『教育報知』の「教室」欄に「之（教科書のこと……引用者註）ヲ定ムルト云フコトニ付キテハ蓋シ二様ノ解釈アリ即チ甲ハ修身教科書ハ之ヲ定メテ児童各個ニ之ヲ持タシムルコト、シ乙ハ修身教科書ハ之ヲ定ムルモ敢テ必シモ児童各個ニ之ヲ持タシムルヲ要セス只之ニ依リテ教授ヲ為セハ則チ可ナリトナス」<sup>45)</sup>と2様の解釈があることを示している。続いて「教室子」自身の解釈と論題提出理由が次の如く述べられている。

「抑々普通学務局長ノ通牒ハ文章頗ル簡単ナレハ斯ク各様ノ解釈アルハ亦止ムヲ得サルコトタリ而シテ余ハ思フ右二様ノ解釈ハ共ニ通牒ノ主意ヲ誤リタルモノナラス即チ該通牒ノ主意ハ要スルニ其一定ノ主義ニ依リテ無害有益ナルヘキ教科書ニ因リテ修身ノ教授ヲ為サンコトヲ希望スルニ過キス然リ然ラハ則チ児童ヲシテ修身教科書ヲ持タシムト否トハ全ク地方当事者ノ自由ニ一任セラレタルモノナリトスルヲ得ヘシ今ヤ修身教科書ハ教師用トシテ生徒用トシテ統々其ノ出版セルモノアルヲ見ル是レ我カ教育社会ノ為頗好便宜ヲ与ルモノタルト同時ニ一面ニハ其ノ選択及之ヲ用フルノ方法ヲ慎マサレハ大ニ此ノ至重ナル修身教育ノコトヲシテ其ノ效益ヲ成サ、ラシメントスルモノアリ是レ余カ茲ニ該件ニ関スルノ論題ヲ提起シテ我カ教育社会ノ与論ヲ惹起セントスル所以ナリ」<sup>46)</sup>（傍点引用者）

すなわち「教室子」自身は、「通牒」の指示する教科書の一定化は教師が教授の際用いる教師用書について規定したものであって、それを生徒各個に持たせるかどうかは全く地方当事者の自由に委ねられたものと解釈しているのである。いずれにしても「通牒」の指示する教科書一定化について教師用書、生徒用書のいずれのレベルで捉えるかについて解釈は一定していなかったと言える。

以上、普通学務局長「通牒」と「小学校修身教科用図書検定標準」をめぐる論評について、特に教師用書と生徒用書の制度化の意義、解釈に焦点をおいて考察してきた。それら論評にみる限りは、教師が教授の際拠るべき指針として教師用書の必要性和重要性が特に強調されており、生徒用書ないし教科書の生徒所持についてはさして注意が払われていなかったと言える。それが次第に、教科書の生徒所持を強調する論が抬頭するようになり、その是非をめぐる論争が明治25年（1892）をピークに20年代後半に展開されるようになる。次に教科書の生徒所持必要論の抬頭とその論拠（教科書観、教育方法観）について考察することにする。

#### 4. 教科書生徒所持必要論の抬頭とその論拠——近世的教科書観・教育方法観の復興——

明治24年(1891)5月刊の『教育時論』に「小学校の修身書に就て」と題する論説記事がある。先ず当時の修身教科書をめぐる論争状況について、「小学校の修身書を定むるの可否てふ問題は、全国教育連合会に於て去る二十八日(4月28日…引用者註)討論せられたるものにして、甲論乙駁一時は人をして其何れに決すべきかを知らざらしむる程なりしも、遂に之を定むることに可決せり。」<sup>43</sup>と多少の論議はあったが教科書一定化で可決したことについて「吾等は大に之に賛成するものなり。」<sup>43</sup>と述べたあと、「而して小学修身書は之を教師の参考用書とすべきか、將た生徒各自に持たしむべきかの問題に移りては、遂に教師の参考用書に止むることに可決せり、此決議に至りては、吾等の決して同意すること能はざる所なり。」<sup>43</sup>と不満の意を呈している。すなわち「小学校に於ては修身書を定むるに及ばず、宜しく之を教師の方寸に一任すべし、との論の如きは固より取るに足らず。」<sup>43</sup>と教科書を用いず教師の口授に一任する方法は当然一蹴さるべくも、「而して教師の参考用書のみを定めて、生徒には一切書物を持たしめずといふ論に至りては、大に以上の説に優るものありと雖も、是亦未だ十分に修身教育の要綱を尽したるものといふべからず。」<sup>43</sup>と批判している点が注目される。すなわちこの論説は、教師用書の一定化のみでなく生徒各自にも教科書を所持させる必要があることを強く主張しているのである。この論説をはじめ、以後登場する教科書生徒所持必要論の論拠、特にそこにみられる教科書観、教育方法観について次に考察してみることにする。

##### (1) 座右の書としての教科書——眼より導く之法——

上掲論説は、当時世に流れていた教科書不用論を論破する形で教科書の必要性、あり方を論じている。先ず「修身書を生徒各自に持たしむるときは、読書科と同様なる姿を生じ、生徒に二重の読書科を課するものなり」<sup>43</sup>(傍丸ママ)といった一般の論に対しては「是生徒に書物を持たしむるの罪にあらずして、生徒に適切な修身書なきが故なり。之を以て直に生徒に修身書を持たしむべからずといふは、甚しき謬論と謂ふべきなり。」<sup>43</sup>と反論している。要するに児童・生徒に適切な教科書を編纂して所持させるべきなのであって、そのことは未だ文字を解し得ない幼児の場合も同様であるとしている。

すなわち「或る論者の如きは、眼(実物)を見せてめの字を知り、齒(実物)を見せてはの字を知るが如き幼児に与ふべき修身書は殆ど之を編著すること難からんと

云へり。」<sup>43</sup>との論者に対しては「是恐くは幼児の教育に経験なきものゝ言ならんのみ。」<sup>43</sup>と痛罵し、まだ字を知らない幼児に対しては絵画を主とする書物を編んで、それを常に座右にあらしめることによってこそ道德教育の効果も挙がり得ると次のように述べている。

「抑修身教育とは、左まで六ヶ敷き事を授くるにはあらずして、日常人の宜しく実践射行すべき正路を指導するに過ぎず。去れば幼児には自ら幼児に適する修身の道あり、之を絵画に現はし、簡單の絵解を与へて、恒に生徒の座右にあらしめなば、此書は生徒の好伴侶となりて、其心志を感発せんことを吾等は之を實地に徴して明知する所なり。」<sup>43</sup>(傍点引用者)

視覚に訴える実物としての教科書観は、森文政期にも顕著にみられつつあったものであるが、<sup>44</sup>そうした教科書観に立脚しての教科書必要論が次第に支配的になっていくようである。この論説でも聴覚に訴える教師の談話のみでなく、視覚に訴える教科書の必要性が次のように強調されている。

「教師の談話を以て幼児を感化することも、甚だ必要なれども、談話は耳より入るものなれば、或は長く心に存ぜざることあり、修身の教育は眼と、耳とより之を導かざるべからず、眼にて其絵画を見、其文章を見れば、生徒は古人の嘉言善行を欽慕して止むこと能はず、己れも亦其人の如くならんとの願望を不知不識の間に抱くに至るは、幼児の常にあらずや、生徒に書物を持たしむるは、眼より之を導くの法なり。而して教師が其教科書によりて、或は之を敷衍し、或は他より例を引きて生徒の学力に順応して之を教授すべきは、固より他の学科と雖も格別の差異なかるべし。」<sup>44</sup>(傍点引用者)

ところで上述の主張から直ちに想起されるのは近世後期における江村北海<sup>45</sup>著の『授業篇』(天明元年・1781)であろう。貝原益軒の『和俗童子訓』(宝暦7年・1710)と並んで近世における最も体系的な教育学書、教育方法書のひとつと目されている『授業篇』においては、武士の家庭や藩校、私塾等を念頭においての読書中心の教育方法論が展開されているが、特に幼少期においては子弟を読書好きに導くための家庭における環境づくりの重要性が強調されている。そのひとつの良法として例えば次のように親が外出した折など、子供への土産として何度かに一度位は「絵草紙」などを買い与え、時々「絵解き」などしてあげることが大事であると説いている。

「凡ソ小兒二三歳ノ頃ヨリ、父母、外へ出て家ニ帰レバ、必ミヤゲミヤゲト求ムル故、世ニイフ人形、及ビサマベノモテ遊ビテ、其度毎ニツカワス事、世上皆同ジ、其ミヤゲヲ遣スニ、二三度ニ一度ハ、何ニテモアレ、世ニイフ絵草紙ヲ求メ帰リテツカワス、モチロン小

児ノ事ナレバ、破リモスルヨゴシモスル、ソレニ頓著ナク、他ノモテアソビト同ジク、打マカセ置ナリ、サレドモ何事モ、其始ヲツ、シムベキ理ナレバ、余ハ絵入ノ二十四孝ノ本ヲ、最初ニツカワシ、其余ハ何ト云事ナク、画ノアル本ヲ遣ス、……画ノアル書ヲアテガヒ置バ、子ドモノナラヒニテ、必画トキヲセヨトセガム、其時カノ二十四孝ヨリハジメテ、タトヘパコレハ舜トイフ聖人、コレハ象トイフ獸、舜ガ親ニ御孝行ニアリシ故、耕作ヲナサレシニ、象トイフケモノ米リテ田ヲ耕シ、鳥ハ鶩ニテ田ノ草ヲクワエテヌキシゾト、カヤウニ云キカス、…」<sup>40)</sup>

該博な知識の習得にせよ、道徳性の涵養にせよ書物を通して、殊に幼少期の場合は絵画主体の書物を身近に置いて時折大人（親）が絵解きなどを通して訓諭していくべきことが重要とされているのである。こうした近世に顕著な書物重視、書物による教育、その背後にある座右の書としての書物観等が、明治20年代の「教育勅語」公布下における教科書重視の政策下において再び息吹き出しているように思われるのである。

## (2) 「徳教ノ手本」としての教科書——教師より教科書が上位——

教科書の生徒所持を主張する論は明治20年代半頃より顕著となるが、明治24年（1891）5月刊の『教育時論』には、文字通り「修身教科書ヲ生徒ニ持タシムベシ」との見出しによる論説が登場している。三重の岡田駒吉という人物による論説であるが、先ず「夫レ修身教訓ニ最モ勢力アルモノハ、教員ノ模範タルコト勿論ナリト雖、教科書ノ有無モ亦重大ノ影響アルモノタルハ、余輩ノ今更喃々スルヲ要セザル所ナリ。」<sup>41)</sup>と修身教育においては教師の模範性もさることながら教科書の有無も極めて重要であると述べる。しかし「教授ニ巧ニシテ品行ノ正シキ教員ハ教科書ノ有無ニ関セズ、善良ノ教訓ヲナシ得ベシト雖、拙劣ナル教員ハ、教科書ノ有無ニ由テ其結果ニ、甚キ差異ヲ来スモノナリ。然ルニ余輩ノ憶測ニヨルトキハ、現今全国ノ教員ニハ巧ナルモノ少クシテ、拙ナルモノ多カルベシ。」<sup>42)</sup>と述べる。すなわち第1節で考察した口授法否定論の論旨と同様、岡田もわが国教員の現状について「拙ナルモノ多」しとの認識のもと、教科書はやはり不可欠であると結論している。そしてその「拙劣」な教師による教授の実状について、特に各科教材の「連絡」を欠く弊を指摘し、「カ、ル教員には連絡アリ程度正キ参考書ヲ持タシムルモ、尚生徒ヲシテ教科書ヲ持タシムルニアリ。」<sup>43)</sup>と教師用書（参考書）はもとよりのこと生徒各自にも教科書を所持せしめることが必要であると述べる。また教科書を持たしめないことによる弊

は、教科書教授に伴いがちな読書の教授の弊をはるかに上回るものであると次のように述べている。

「反対論者ノ言ノ如ク、読書のノ教授ニ傾クコトハコレアラン、興味ヲ添フル能ハザルコトモコレアラン、然レトモ其弊ヤ教科書ナクシテ昨日ノ教授事項ノ未ダ生徒ノ脳裡ニ浸潤セザルニ、早ク己ニ新事項ノ注入ヲ始メ、以テ生徒ヲシテ転タ迷路ニ彷徨セシムルニ執レゾ…」<sup>44)</sup>

教科書教授は確かに生徒の興味を多少そぐ懸念はあるかも知れないが、「生徒ヲシテ転タ迷路ニ彷徨セシムル」口授法よりはましであること、また「教科書ヲ持タシメザルトキハ、許多ノ事項ノ永ク記憶ニ存スルヲ難ク……」<sup>45)</sup>と、記憶保持という点からも教科書は必要であるという。さらに注目されるのは次の叙述である。

「且ツ平生教授ノ際生徒ノ注目スル所ハ、教員ノ眼口態度等ニアレバ、拙劣ナル教員ノ粗野ナル言語挙動ハ、自然ニ生徒ヲシテ輕侮ノ念ヲ起サシメ、遂ニ以テ修身ノ価値ヲ失フニ至ルコト往々コレアルニ於テオヤ、之ニ教科書ヲ持タシメテ生徒ノ注意ヲ繫クニ比スレバ、其利弊果シテ如何ゾヤ。」<sup>46)</sup>（傍点引用者）

口授法を方針としていた森文政期においては教師自身の躬行実践による感化、すなわち教師の「儀範」性が極めて重視されていた。<sup>47)</sup>しかるに上述の文では「拙劣ナル教員ノ粗野ナル言語挙動」はかえって逆効果を来たすものであるとの認識に立って、教師よりはむしろ教科書に生徒の注意を繫ぐべきことが主張されているのである。まさに教師と教科書の位置の転倒がそこにはみられると言えよう。なおこうした教科書の重視は、明治10年代（改正教育令期）、さらには近世の道徳教育についての次の如き評価にもあらわれていると言えよう。

「試ニ思ヘ、七八年前生徒ニ教科書ヲ持タシメシトキノ成績ハ、今日ヨリモ幾倍ノ上出来ナリシコトヲ、当時教員ノ教授術今日ヨリ数等下リシニモ拘ラズ、其成績ノ見ルベキモノ多カリシハ、幾分か社会ノ変遷ニ順応シテ、質朴活潑其気風ヲ異ニスルニヨルトハ雖モ、或ハ是レ教科書ヲ持タシメシニヨラズンバアラザルナリ、尚比較シ得ベクンバ、従前ノ私塾寺子屋ヲ顧ミヨ、当時修身科ナルモノアルコトナシ、然レトモ其品行ノ今日ヨリモ尚見ルベキモノアリシハ、師匠ノ模範其他種々ナル原因アリシニヨルト雖、抑亦童子訓、実語教、女大学ヨリ漸ク進ミテ学庸論孟ノ諸書之ガ原因タラズンバアラズ、」<sup>48)</sup>（傍点引用者）

すなわちかつて道徳教育の成果にみるべきものがあったその要因を、教科書や様々な教訓書に求めているのが特徴的と言える。しかも近世の場合については、「而シテ是等ノ原因タル多クハ師匠ノ講釈ニヨルニアラズ、只

是レ讀書遍意自ラ通シタルニ由ルノミ。」<sup>60</sup>（傍点引用者）と教師の教授（講釈）に由るよりはむしろ生徒自身の読書による効であったとしている。読書主体の自学主義的なわが国の教育方法の伝統が再評価されている点も極めて注目されることと言えよう。<sup>61</sup>かく教師よりも教科書を上位におく位置づけ方の転換は、明治24年（1891）4月刊の『東京茗溪会雑誌』に掲載された「倫理ノ教授ハ教科書ニヨルカ或ハ口授ノミナルカ」と題する三刀谷扶綱の論説にも明瞭に窺える。その論説の要旨については前節でも若干紹介したが、要するに教師の資質の現状から、わが国においては口授法は不適であるとの結論である。すなわち「倫理ノ教授ハ若シ之ヲ教ユル教師タルモノ能ク徳望アリテ且其演述ノ順序言語ノ抑揚感情ノ発表等ニ於テ巧ミニシテ恰モ其人物ノ精神ヨリ湧出セルガ如クナレバ其効能アルコトハ何物モ口授法ニ勝ルハアラズ」<sup>62</sup>と述べつつ、「然レトモ實際ニ當リ此ノ如キ人物ノ教師ハ甚ダ稀少ニシテ若シ庸劣ノ教師ニシテ之ヲ真似スルトキハ徒ラニ其外形ニノミ走リテ其正鵠ヲ失フニ陥ルベシ」<sup>63</sup>と述べる。一方「是ニ反シテ教科書ヲ採択スルトキハ生徒ニ対スル徳教ノ感情ハ口授ヨリモ強カラズト雖トモ然レトモ之ヲ授クルノ容易ニシテ且順序ヲ誤ラザルハ庸劣ノ教師ニ在リテモ為シ能フ所ナリ況ンヤ賢明ナル人物ニ於テオヤ」<sup>64</sup>という理由から、「庸劣」な教師の多いわが国の現況においては教科書を採用するのが妥当であるとの結論を下しているのである。<sup>65</sup>

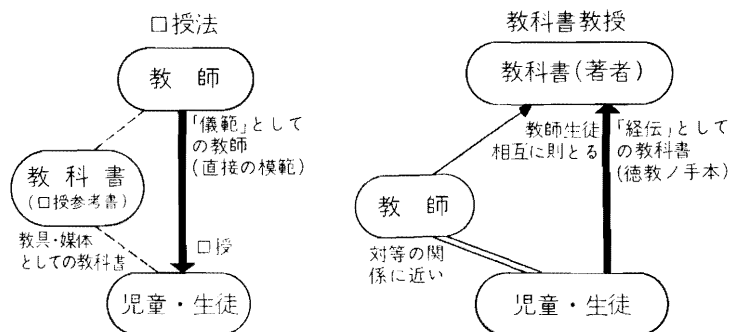
この論旨は第1節で考察した大方の口授法否定論と全く同様であるが、この論説で特に注目されるのは口授法と教科書教授の授業構造について次の如く言及していることである。「口授ハ教師ノ口ヨリ出ルヲ以テ其一言一句ハ大ニ其人物ノ如何ニ影響シ教師ハ直ニ生徒ノ模範トナルノ傾向アリ此故ニ其人物善良ナレバ大ニ善果ヲ結ブベク不良ナレバ大ニ惡果ヲ結ブベシ然ルニ教科書ヲ採用スルトキハ教師モ生徒モ共ニ其書物中ノ善言嘉行ヲ模倣シ教師生徒相互ニ此ニ則トルノ傾向アリ」<sup>66</sup>（傍点引用者）すなわち口授法と教科書教授の各々の場合について、教師、児童・生徒、教科書の三者の関係構造を試に図示してみるとすれば右上図のようになるであろうか。

口授法と教科書教授についての上述した如き認識に立

って三刀谷は、重ねて、わが国は教科書教授に拠るべきであると述べる。

「此点ヨリ考フルトキハ實ニ教科書ヲ以テ良法トナスナリ其故ハ世ニ善良完全無欠ノ教師乏シキハ人々ノ認ムル所ニシテ如何ニ考フルモ現今ノ教師ヲ以テ安心シテ孔孟又ハ「ソクラテース」ノ流洩ト為スヲ得ズ云ハバ教師モ生徒モ只多少ノ差コソアレ尚ホ共々ニ徳教ノ手本ヲ置キテ之ニ近ヨルヲ求ムベキノ地位ニ在ルモノナリ左レバ生徒ヲシテ直ニ教師ヲ手本トシテ安心セシムルハ嗚呼ガマシキノ至リト云フベシ」<sup>67</sup>

## 口授法と教科書教授の授業構造



戦前の「教科書を教える」方法から戦後は「教科書で教える」方法に変わったということは一一般に指摘されていることであるが、その図式はよりミクロにみると戦前の修身教育における教科書教授と口授法についても当て嵌まるものと言えよう。但し戦前の教科書教授 v.s. 口授法の場合は教育の主体（ウェイト）としての教科書重視か教師重視かの相違であって、いずれも児童・生徒が受動的立場に置かれていた点では共通であったと言えよう。その点において児童・生徒の自発性、主体性、創造性、活動性を重視する戦後（昭和20年代）の教育方法とは理念的、質的にも相違するものと言わなければならないであろう。

すなわち彼によると教師と生徒は比較的対等の立場で、共に「徳教ノ手本」たる教科書に学ぶべき存在であるということになる。

「教師タルモノハ自己ノ外別ニ一箇ノ高尚賢明ナル標準ヲ置キテ生徒ト共々ニ自ラ率先シテ其標準ニ近ヨルヲ求ムベシ若シ然ラズシテ単ニ教師ヲノミ模範トナストキハタトヒ賢明ナル人物ト雖トモ人間ト云ヘル実在物ノ行為ニハ時アツテ欠典ナキ能ハズ左レバ善良嘉行ヲ抽象拔出セル書物ニハ劣ルコトアリト云フベシ況ンヤ現世ニ於テ賢明ナル人物ノ曉星只ナラザルニ於テオヤ」<sup>68</sup>

道徳教育において最も重要な、拠るべき指針、則るべき模範としては、とかく「欠典」多き教師という実在物（人間）よりは善良嘉行を「抽象拔出」した書物の方が適切である、との認識をそこにみることが出来る。

(3) 「経」「伝」としての教科書観——著者の人物如何を問う——

明治24年（1891）8月刊の『教育報知』の「偶感漫録

（続）」欄に次の叙述がある。

「生徒ニ修身書ヲ持タシムヘキヤ否ヤニ付テハ、余ハ宿論ヲ有ス。世人、動モスレハ輒チ曰ク、小学校ノ修身教育ハ、教師ノ儀範ニ由ルヘシ、喃喃ノ百話、更ニ其益ナシト。実ニ然リ、余輩ト雖モ、此論鋒ニ反対スルコトナシ、然レトモ此一片ヲ論シテ、教科書ヲ無視シ、且ツ擯斥スルコトアラハ、決シテ服スルコトアラサルナリ。」<sup>84</sup>

このように教科書の必要性、有用性を主張した論者は、さらに次の如く、修身教授において重要なこと、根本は信（信ずる）であって、この点児童生徒の信を教師ではなく教科書に置かしむべきであると主張する。

「彼ノ教師ノ儀範ト云フモ、畢竟、信セシムルニ非スヤ、而シテ此信ヲ置クハ、如何ナルモノニ於テスルヤト云フニ、例ヘハ神仏ノ如ク、已レヨリ遙ニ上ナルモノニ於テス、果シテ然ラハ、教科書ヲ以テ児童ハ如何ナルモノト考フルヤ、必ス已レヨリ、否、已レノ教師ヨリモ、猶ホ一層、優等ナル人ノ作レルモノト信スルナルヘシ、故ニ之ニ向テ信ヲ置クヤ必ス深シ、常ニ某書ニ此ノ如クアリ、某古人、此ノ如キコトヲ言ヘリト云フトキ、大ニ信シテ服膺スルニテモ知ルヘシ。故ニ余ハ善良ナル、適当ナル、教科書ヲ持タシムヘキヲ主張セントス。」<sup>85</sup>（傍点引用者）

神仏の如く「遙ニ上ナルモノ」、己れより、否教師よりも優等なる人の著した書物（教科書）にこそ児童の信（信仰）を繋ぐべきであるとするその論旨には、まさに書物を神聖視するというわが国古来の伝統的書物観の復興をみることが出来よう。

先の書物を座右に置くべしとの主張が江村北海の『授業篇』を想起させるものであったように、ここで直ちに想起されるものは近世の朱子学者貝原益軒<sup>86</sup>の代表的教育学書『和俗童子訓』であろう。すなわちそのなかに次の如き叙述がある。

「聖人の書を経（けい）と云。経とは常也。聖人のをしえは、萬世かはらざる萬民の則（のり）なれば、つねと云。……賢人の書を伝と云。伝とは聖人のをしえをのべて、天下後代につたふる也。……経伝は是古の聖賢の述作（のべつく）り給ふ所なり。其所レ載（のする）は、天地の理にしたがひて人の道ををしえ給ふ也。其理至極し、天下万世のをしえとなれる鑑（かきみ）なり。天地人と万物との道理、これにもるゝ事なき故、天地の間、是にまされる宝更になし。是を神明のごとくにたうとびうやまふべし。おろそかにし、けがすべからず。」<sup>87</sup>

「聖人の書を経（けい）と云。……賢人の書を伝と云。」とある、この「経」「伝」としての書物観にこそ、書物神聖観の典型をみることが出来よう。かかる「経」

「伝」こそはまさに「聖賢の述作（のべつく）り給」うが故に「天下万世のをしえとなれる鑑（かきみ）なり。」という言い方に、書物の著者を重視する考え方が表われているが、同様の傾向が明治20年代の修身教科書についてもみられるようになる。例えば『教育報知』265号（明治24・5・20）第一面の社説欄に「修身教科用図書の編纂に就きて」との記事がある。冒頭に「修身教科用図書の教育に必要なハ工具の職工に於けるより甚し」<sup>88</sup>と教科書の不可欠なことを述べ、かつ「修身用の教科図書に於てはその効力をして真に教科用図書たらしむるの価値あらしめざるへからず」<sup>89</sup>と述べる。そして特に修身教科書においては著者の如何が極めて重要であると次のように述べる。

「縦ひその事項の如何に善美を尽しその叙論の如何に巧妙を極むるもその著者の名望徳采なく加之著者その人の素行修らざる等に於てハ大に図書の上に信用の厚薄を生ぜざるを得ざるものなり例ヘハ茲ニ菅公の著述せる修身書と吉備大臣の著述せる修身書とあらんにその学識の上に於てハ仮に伯仲なきものとして考ふるも世人の信認上に於てハ大に相違を生ぜざるを得ざるへし……されば学校教育に於て修身用図書を定むるにハその著者の名望品行の最も忠良確實にして且成るべく自己の実践躬行したる徳行を類聚したる如きものにあらざれば決して教科用図書として効力を有するものにあらざるなり」<sup>90</sup>

かく述べつつもその現状については次の如く憂慮している。

「然るに近時一般教科用図書の梓に上るものを見るに充棟猶及はざるの有様あり然れとも倩々その修身用教科図書を採集し来るときハその真に善良と云ふべきものハ恰も晨星の寥々たるが如し時に或ハ僅かに編纂方法の当を得るものあるかと思へば何んそ計らん著者の名望位置一として世人の信仰を受くるものなきあり其他白面の書生あり或ハ自称の道德家あり或ハ営業の著者あり或ハ釣名の作士あり……畢竟教科用図書の営業出版に出て及び著者作士の釣名営利に基けるより出てたるハ当今の実況に於て争ふへからざるなり」<sup>91</sup>

教科書の著者如何を重要視する傾向が以後もかなり支配したことは、明治26年（1893）11月刊の『教育報知』に「近時修身教科書ニ関シテ其ノ著者ヲ選フノ必要ナルヲ論スルモノ多シ」<sup>92</sup>とある記事からも察することが出来る。以上、明治20年代半より抬頭する教科書生徒所持必要論の背後には、座右の書、「徳教ノ手本」、「経」「伝」としての教科書観等がみられることを指摘してきたのであるが、そうした教科書観のもと、教師より上位に位置づけられ、絶対視され権威づけられた教科書を通して「教育勅語」の理念を国民に浸透させていこうとす

る“天孫降臨”的教化方法<sup>99</sup>、教育実践構造が次第に確立していくことになったとみてよいであろう。

以上、本稿は森文政期以後の、「教育勅語」、第2次「小学校令」公布下の修身科教授法について考察した。具体的には、明治24年(1891)の普通学務局長「通牒」および文相「訓令」に示された口授法から教科書採定への方針転換をめぐって惹起された様々な論説や論争を、教科書・教育方法論争として捉え整理を試みたつもりである。内容を要約すると、教師の資質の現状から口授法を不適とする論が明治10年代より醸成され、それを媒介・背景としつつ「教育勅語」公布という状況が、教授の指針、拠り所としての教科書の有用性と一定化の必要を促すものであった。かくして修身科にも検定教科書制度が適用されることとなるが、明治24年(1891)12月の「小学校修身教科用図書検定標準」で制度化される教師用書と生徒用書の意義づけや解釈が論争史的にはひとつの重要論点であった。その点について教育雑誌上の論評記事等をみる限り、当初は教師が教授上掲るべき指針として教師用書的重要性が強く認識され、生徒用書ないし教科書の生徒所持についてははさして注意が払われていなかったと言える。それが次第に教科書の生徒所持の必要性が強調されるようになる。そしてその論拠としては、座右の書、教師・生徒が共に則るべき「徳教ノ手本」、天下万世のおしえとなる「経」「伝」といった教科書観や読書重視の教育方法論など、わが国近世に顕著であった伝統的教育観の復興を看取することが出来た。ところでこの修身教科書の生徒所持については、その可否をめぐる論争が明治20年代後半に活発に展開されることになる。論争史的観点から当然考察すべきテーマであろうが、紙幅の関係で次稿に譲らざるを得ない。

## 註

- (1) 拙稿「森文政期における修身科口授法の採用とその教育観的背景」『弘前学院大学・短期大学紀要第20号』1984年3月)
- (2) 明治23年(1890)10月公布の第2次「小学校令」は、その第16条において「小学校ノ教科用図書ハ文部大臣ノ検定シタルモノニ就キ小学校図書審査委員ニ於テ審査シ府県知事ノ許可ヲ受ケタルモノニ限ルヘシ」(『明治以降教育制度発達史』以下『発達史』と略記 第三卷 728頁)と教科書の検定強化を謳ったうえで、その「審査委員」に関して次のように規定していた。「審査委員ハ府県ニ置キ府県官吏府県参事会員尋常師範学校校長教員及小学校教員ヲ以テ之ヲ組織ス 審査委員及審査ニ関スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム」(同前)。これに基づき明治24年(1891)11月17日、文部省令第14号をもって小学校教科用図書等に関する規定が定められたのであるが、その「説明」の部分に次の如くある。「小学校教則ノ改正ニ依リ教科目ノ異動ヲ生シタル等ノ場合ニ於テハ教科用図書ヲ更定スルノ已ムヲ得サルモノアルヘシト雖モ成ルヘク在来ノ教科用図書ヲ用フルヲ可トス是レ本則ノ施行前ニ於テ地方長官ノ定メタルモノハ仍其効力ヲ有センメタル所以ナリ 抑モ教科用図書ハ依リテ以テ教育ノ目的ヲ達スル主要ノモノニシテ又經濟上重要ナル關係ヲ有スルモノナレハ之カ審査ニ就キテハ最モ慎重ヲ加ヘサルヘカラサルハ言ヲ俟タズ故ニ地方長官ニ於テ之ヲ新定若クハ更定セントスルニ當リ先ツ郡市等ノ教育会ニ諮詢シテ教科用ニ適当セリト認ムル図書ノ目錄ヲ出サシメ之ヲ審査委員ノ参考ニ供スルカ 如キハ或ハ一ノ便法ナラン」(同前書 30頁)
- (3) 『発達史』第三卷 731頁。
- (4) 同上。
- (5) 普通学務局長「通牒」が出されるには次の如き背景があったことが指摘されている。明治24年(1891)4月、全国教育連合会において「小学校ノ修身書ヲ定ムルノ可否」について討議し、その結果に基づいて大日本教育会(会長辻新次)が同年9月、大木文相あてに「小学校ノ修身書ヲ定ムル儀ニ就テノ建議」を行い、修身の教師用書を一定にすべきこと、高等科生徒に修身書を持たせることを勧告した。このような経過を受けて、同年10月、大木文相が普通学務局長に命じて以後小学校修身教科書の採定を要する旨の通牒を発せしめたのであった。(『近代日本教科書教授法資料集成』、以下『資料集成』と略記 第五卷 教師用書Ⅰ修身篇 東京書籍 646～7頁。)
- (6) 教育方法の転換には、それを実践する教師の資質の実状というものが有力な媒介をなしているようである。例えばベスタロッチー主義の開発教授からヘルバルト派の五段階教授法への転換においても、「ある限られた極めて有能な教師にのみなし得る教育方法でなくて、どのような教師でもその方法によれば十分な教授がなし得るというような実際の教育方法を求める」(『日本におけるヘルバルト派教育学受容の経緯 唐沢富太郎』『人間観と教育方法』明治図書 昭和32年 140頁)ということも主要な動機となっていた。
- (7) 『発達史』第三卷 731頁。
- (8) 西村貞の略歴。安政元年(1854)栃木県足利に生まれる。幼年時代足利学校に学び、明治3年足利藩の貢進生として大学南校に入学。明治8年、開成学校を退学して東京英語学校(予備校)の英語教師となる。明治9年、大阪師範学校長。明治11年、師範学科取調の目的でイギリスに留学、13年帰朝。文部省出動。明治18年、文部省少書記官。明治21年頃、第五高等学校教頭、その後、文部省視学官、参事官を務め明治25年、38才で官を辞し専ら大日本体育会に尽力。訳著書『小学教育新論』(全5巻、明治14年)、『中等教科教育史』『中等教科内外教育史』(明治29年、共著)など。(唐沢富太郎編『図説教育人物事典 中巻』ぎょうせい519頁参照)
- (9) 「小学校教員ノ急務 西村貞演述」『大日本教育会雑誌』2号(明16・12・25)41～3頁。
- (10) 『教育時論』104号(明21・3・5)に「教育家は談話の巧なるを要す 郡司篤則」との記事があるが、そこでは談話の巧拙が良教師であるか否かの重要な決め手である次のように述べられている。「抑も談話の巧拙に因り聴く者をして、快不快の感覚あらしむるは自然の勢なりと雖も、特に児童の教育上に於ては、其影響決して少小にあらざる也、教育者たるもの、假令學術に長ずるにせよ、授業法管理法完全にして、器具器械は整頓するにせよ、談話にして趣味なく、変化なく、言調に拙劣なるときは、何程齟齬として業に従ふも、己れ思想を児童に感通せしむること能はざるべし、必竟するに教育者が巧妙の談話をして、児童を感動せしむるは、恰も電氣の其性に随て、彼此互に相感するが如し、……良教育家の談話の技量に因りては、其結果に良否の別を現すの理知るべき也、……世の教育家たるもの何ぞ猛省せざるを得んや。」(6頁)

- 01 「修身科口授 洒落生」『教育報知』94号(明20・11・26) 6～7頁。
- 02 註(9)と同じ。
- 03 西村は、明治25年(1892)の演説において次のように述べている。「以前でも相應に学校を見て見聞を持て居りますがどうも此日本の教育と云ふものは一言で之を言へば到底大要教科書に依らなければ遂げることハ出来ぬ……殊に智育の教授と云ふものハ教科書を媒介にしてやるのが早道である口授と云ふも教科書を用ゆると同じことで二度の暇を潰すと同じであります」(『教育上二の私見』西村貞君演説)『教育報知』327号 明25・7・26 7～8頁)
- 04 「德育論 第一 田中登作未定稿」『教育時論』18号(明18・10・15) 12～3頁。
- 05 「口授法の得失 土方勝一」『東京茗溪会雑誌』66号(明21・7・20) 6～10頁。
- 06 「口授法ノ得失 其二 土方勝一」同上誌69号(明21・10・20) 14～7頁。
- 07 「北豊島郡授業批評会 尋常科三年生修身科 授業者 北川新二」『教育報知』117号(明21・5・5) 6頁。
- 08 『教育報知』287号(明24・10・31)に「口授筆記法に就て。」と題する寺田勇吉の論説記事があり、口授筆記法の様々な弊害が指摘されている。以下その内容を若干紹介してみよう。先ず「今や夫の教科用書の会説に類する教授法ハ、其跡を絶ち所謂口授法あるもの漸く其緒を開くに至りたるハ教育上大に好すべく喜べきことなり、」(10頁)と教科書法から口授法へと推移してきた現況を述べ、「然れとも一利一弊ハ、事物の免るへからざるの数か、近時此法に伴ふ所の弊害、亦尠しとせず、即ち其弊害の一として、余輩の親指を屈せしむるものハ、今日殆く諸般の学校に行ふ筆記法なるもの是なり。」(10頁)と口授法に伴う弊害の最たるものこそが、今日普く学校に行われている筆記法であるとして、その実況を次の如く述べている。「試みに学校に至りて、教授の実況を見よ、教師ハ悠然として教案に凭り、一種の参考書又ハ草稿を誦読するものに似たり、生徒ハ「ペン」又ハ筆を以て、頻りに教師の講ずる所を筆記す、其状恰も速記術の練習に異ならず、……其教場に在るの間ハ、心専ら筆記に馳せ、耳目手腕、一に此事に忙しきより、脳裡復た講義の意味を考ふるの余地なし、……是果して二十世紀の教授と云ふべきか、」(10頁、傍点ママ)。なおこの口授筆記法は、ドイツ諸邦にも広く行われていたのであるが、わが国のそれとは随分趣きを異にしていたようで「即ち其方法に依れハ、生徒ハ常に「ノートブック」を携ひ、静かに教師の講ずる所を聴き、唯数字に関するもの、記憶に難きもの、又ハ重要な事実を摘録する而已其家に帰るや、曩きに摘録する所に基き、自ら綜目を編み、順序を立て、事実を補ひ、以て一篇の文章叙事を成すを法とす、其生徒をして事物を理會せしめ、且之を活用せしむるの効、豈に我カ筆記法の比ならんや、故に生徒ハ、家に帰るの後、袖手書を省みるか如き、閑なしと雖も、而も亦試験に臨んで、遽かに筆記の暗誦に苦むか如き、煩勞あるを知らず、蓋し生徒ハ斯の如くにして、始めて克く其受くる所を理會し、其學ぶ所を活用するを得へし、是之を真正の口授筆記法と云ふべきか、」(10～11頁)

このように口授筆記法と言いつつも日本とドイツの相違に言及した彼は、さらにわが国の口授筆記法の生徒身体面に及ぼす弊害について次のように指摘している。「終日目を低れ、体を屈して、耳目手腕を勞す、豈に其衛生に害なくして止まんや、是に由て之を觀れハ、我カ口授筆記法ハ、實に教授そのものハ良結果を収むへからざるのみならず、亦生徒の衛生を害ふものと云ふへし、」(11頁、傍点ママ)

さらに口授筆記法の成果における日本とドイツの相違に

ついて、善良の教科書に欠けることもその一因であるが、「其重なる原因ハ教員たるものハ、授業法の実験、未だ定らざるの故に在らん歟」(11頁)と教師の授業法実験の欠如にも求めている。すなわち「退て我が国の実況を考ふるに、世の教員たるもの、概授業の実験に於て、尙遺憾なき能ハす、要するに師範学校の卒業生を除くの外ハ、殆んと教育、教授の実験なきものと云ふも、亦甚しき誣言にあらざるへし、殊に私立学校に至ってハ、一層其太しきを覚ゆ、」(11頁)と述べている。

- 09 註04と同じ。
- 10 「修身教授ノ弊害ヲ論ズ あ、こ、」『教育』33号(明23・3・25) 49～50頁。
- 11 『発達史』第三巻731～2頁。
- 12 註(1)掲出拙稿註09参照。
- 13 「修身教科書ノ説 日本弘道会会長西村茂樹」『教育時論』204号(明23・12・15) 8～9頁。
- 14 『発達史』第三巻 731頁。
- 15 註03と同じ。
- 16 「西村君ノ修身教科書説ヲ読ム 清水直義」『教育報知』252号(明24・1・25) 7～8頁。
- 17 「西村茂樹先生の修身教科書の説を読む 林吾一」『国家教育』5号(明24・12) 13～4頁。
- 18 註09と同じ。
- 19 『資料集成』第五巻 643頁参照。
- 20 例えば明治20年(1887)に出版された修身教科書『尋常小学校生徒用修身書』(辻敏之、岡村増太郎合著 全8冊普及社)は、その「例言」に「児童ニ修身科ヲ教フルニハ談話ニ由リテ教員自言行ノ模範トナラザル可カラズ故ニ此ノ書ハ分チテ教師用ト生徒用トノ二トナシ教師用ノ書ニハ事柄ヲ掲ゲ生徒用ノ書ニハ其ノ図画ヲ掲ゲテ談話ヲ聞クノ傍之ヲ目撃セシメ又其ノ談話ニ対スルノ格言ヲ載セテ之ヲ記憶セシムルモノトス」とあり、教師用書と生徒用書の事実上の区別は、明治24年(1891)の制度化に先立ってすでに成立していたのである。(上掲『資料集成』第五巻 645頁)
- 21 第2次「小学校令」下の教育内容を規定した「小学校教則大綱」の第二条は修身科に関して次のように規定している。「第二条 修身ハ教育ニ関スル 勸語ノ旨趣ニ基キ児童ノ良心ヲ啓蒙シテ其徳性ヲ涵養シ人道実践ノ方法ヲ授クルヲ以テ要旨トス 尋常小学校ニ於テハ孝悌、友愛、仁慈、信実、礼敬、義勇、恭儉等実践ノ方法ヲ授ケ殊ニ尊王愛國ノ志氣ヲ養フハ本コトヲ務メ又國家ニ対スル責務ノ大要ヲ指示シ兼ネテ社会ノ制裁廉恥ノ重シムヘキコトヲ知ラシメ児童ヲ誘キテ風俗品位ノ純正ニ趨カント注意スヘシ 高等小学校ニ於テハ前項ノ旨趣ヲ括メテ陶冶ノ功ヲ堅固ナラシメンコトヲ務ムヘシ 女児ニ在リテハ殊ニ貞淑ノ美德ヲ養フハ本コトニ注意スヘシ 修身ヲ授クルニハ近易ノ俚諺及嘉言善行等ヲ例証シテ勸戒ヲ示シ教員身自ラ児童ノ模範トナリ児童ヲシテ浸潤薫染セシメンコトヲ要ス」(『発達史 第三巻』95～6頁。
- 22 『発達史 第三巻』732～3頁。
- 23 「小学校修身教科用図書検定標準公示に付一言す」『教育報知』294号(明29・12・19) 22頁。
- 24 「小学校修身教科用図書検定標準ヲ評シテ教科書事業ニ及ブ」同上誌 295号(明24・12・26) 3～4頁。
- 25 第三項については「大体ニ於テハ賛成セリ、然レトモ其細目ニ至リテハ異議アルヲ免レス、」として例えば「何故ニ尋常小学校ニ於テハ男女ニ之ヲ分タサルヤ、教師用ハ何故ニ如何ナル場合ニ於ケルモ之ヲ男女ニ分タサルヤ、男女児ヲ同一学級ニ編制セル学校ニ於テハ之ヲ分タサルモ何故ニ妨ケナキヤノ三点」と男女別編纂の必要を挙げている。第

- 四項以下第七項に至るまでは賛成、ただし第六項の「相応セル」の字句については「未タ以テ吾儕ノ意ヲ満タスニ足ラス」と付している。(3～4頁)
- 66 「修身教科用図書検定標準ニツキテ 太田政徳」『教育報知』295号(明24・12・26)10～11頁。
- 67 第三項以下の論評について紹介すると、第三項の教科書の男女別編纂については、男女の処生の道は本来異なるのであるから、その道徳内容が区別されるのは当然であるが、高等小学校に於て男女児を区別しない場合については「男女共ニ同一ノ図書ニ由リテ教授ヲ受ケシムルモ差支ナキ体裁ノモノヲラサルヘカラス」と検定標準の趣旨と同様のことを述べている。次に第四項の事項(徳目)の配列についても「従来流布セル修身書ヲ閱スルニ一篇ノ図書ヲ道徳ノ分類ニヨリテ区別シ一冊ノ書偏ニ二ノ徳ニ関スル事項ヲ以テ充塞セルモノ多シナカラス」と批判し、「其掲載ノ事項成ルヘク一学年毎ニ道徳ノ全体ニ渉リ漸次学年ノ進ムニ随ヒ程度ノ浅深アルヘキコト、セラレタルナリ」と検定標準の趣旨を紹介している。第五項の例話の内容についても当然であり、第六項の文字文章を平易にということも「敢テ標準ノ検定ヲ俟タサル」こととしている。第七項の挿画は鮮明にして「道徳訓養ニ裨益アルモノタルヘシ」も当然のことでは「其図画ハ鮮明ニナラサルカ又ハ鄙野ナルカ為ニ却テ児童ノ心ヲ困迷セシムルカ如キハ注意ノ得タルモノト謂フヘカラス」と述べ添えている。最後に、教科書国定化説も一部に流れているが、文部省の意図はあくまで検定制であると次のように述べている。「道路伝フル者アリ曰ク文部省ハ修身教科書ヲ編纂シ全国ノ小学校ヲシテ強テ之ヲ用ヒシメントは何ノ言ソヤ若シ果シテ其浮説ノ如クンハ文部省ハ何ノ必要アリテ検定ノ標準ヲ制定シテ之ヲ公布スル所アリシカ之ヲ制定シテ之ヲ公布スル是則チ汎ク民間出版ノ教科書ヲ検定シ小学校ノ修身教授ヲシテ良結果ヲ得シメントスルニアルヤ明ナリ」
- 68 「賀普通学務局長之通牒。三刀谷扶綱」『教育報知』286号(明24・10・24)9頁。
- 69 「吊普通学務局長之通牒。芝はた、生」同上誌287号(明24・10・31)2～3頁。
- 40 同上, 同上誌288号(明24・11・7)8頁。
- 41 『日本近代教育百年史4』上巻(1978)。国立教育研究所, 1974年210頁。
- 42 『教育報知』309号(明25・4・2)「教室」欄3頁。
- 43 「小学校の修身書に就て」『教育時論』218号(明24・5・5)8～9頁。
- 44 註(1)掲出拙稿。
- 45 註(43)と同じ。
- 46 江村北海の人物と略歴。正徳3年(1713)福井藩儒伊藤竜洲の第2子として播州(兵庫県)赤石に生まれる。朱子学派の儒者で片山北海、入江北海と並び「三北海」と称せられる。享保18年(1733)21才の時、宮津侯の儒臣江村毅庵の後を嗣ぎ、以後江村姓を称す。江村氏の家職である青山侯の藩儒として禄仕、藩の美濃国郡上への移封に伴って郡上に移り住む。天明年間、二代藩主青山幸完の藩校潜竜館創設事業に際しては大いに尽力、郡上藩の文教興隆に大いに貢献する。没年天明8年(1788)。著書としては『日本詩選』と『授業編』の2つが特に注目される。『日本詩選』は正・統14巻で日本人の手になる漢詩を集録した最初のものとして文学史上、大きな功績とされている。『授業編』は10巻から成り、教授法を体系づけたものである。(前掲『図説教育人物事典 上巻』184頁)
- 47 『日本教育文庫 学校篇』(黒川真道編 日本図書センター)所収「授業篇 巻之一」583～4頁。なお中泉哲俊氏は、江村北海が『授業篇』において小児の学習に絵解きと談話を用いるなど直観的方法を採り入れるべきことを強調している点について「宛然コメニウス(Comenius, J.A. 1592—1670)の『世界図絵』(Orbis Sensualium Pictus. 1658)を嚆矢たらしめるものがある。」(『日本近世学校論の研究』風間書房 昭和51年 75頁)と述べている。
- 48 「修身教科書ヲ生徒ニ持タシムベシ 三重 岡田駒吉」『教育時論』220号(明24・5・25)33～4頁。
- 49 註(1)掲出拙稿参照。
- 50 註(48)と同じ。
- 51 戦前の著名な日本教育史学者春山作樹氏は、わが国近世の教育学書等いずれも「学問」「読書」「立志」等を強調していることから自学主義の傾向が強く、西欧の「教授学」的教育学と極めて対照的であることを指摘した。(春山作樹著『日本教育史論』国土社 1979年参照。)また最近においては中内敏夫氏が、日本人の教育意識や教育思想を、古来使用されてきた『辞書』に登場する教育関係用語を分析するという方法で研究を行い、日本には伝統的に「教授法」的教育観でなく「学習法」的教育観が支配的であったことを指摘している。([日本人の教育意識と発達観念』『近代日本教育思想史』中内敏夫著 国土社 1973年刊所収参照)
- 52 「倫理ノ教授ハ教科書ニヨルカ或ハ口授ノミナルカ 三刀谷扶綱」『東京若溪会雑誌』99号(明24・4・20)19～21頁。
- 53 関連して注目される論説記事があるので紹介しておきたい。アメリカ人ウィリアム・ハリス氏の「口授法と教科書教授との利害」(『教育時論』128号 明21・9・15)と題する論説である。そのなかで氏は、「口授法にては、教師たる者が教授の源泉なれども、教科書教授に於ては、生徒を教科書に一任する者とす。」(26頁)と述べ、「されば熟練なる教授には、熟練に拘るも甚き弊害を見ざれども不熟練の教授には、両者ともにその弊害を免がれず。」(26頁)とも述べている。次に両者の利害得失について、「口授法の利とする所は、教師が教師ぶるの弊を矯むると、生徒をして自然に自己の活動力を働かしむるとの二つにあり。其害とする所は、教科の主意を教授するに混雑に陥り易きと、平易浅近の言語を用ふるが為に學術上の事柄を簡明に教ふべからざる事と、又生徒に復習と解説とをなさしめずして無暗に注入する如きの風ある事なり。」(26～7頁)と述べている。一方教科書教授については「その利とする所、教師が生徒に向ひて教科の主意を教課するにあらずして、生徒自身にこれを勉強し、その難問題をも生徒が自らこれを解かんとする」(27頁)自発的学習にあるが、教師がそのことに留意せず「生徒をして教科書中の文字言語を暗誦せしめ、その主意を了解せしむる事を務めざる如き、若くは教科書を誦読せしむるのみにて、復習を務めざる如き」(27頁)だと弊害も少なくないという。最後に「されど教科書を巧に利用する教師は、生徒をして勉強と精密と自助の力とを得せしむるの利器となすは、吾々の屢見る所なり。」(27頁)と述べている。なおこの最後の指摘に関連する論説として『教育報知』132号(明21・8・18)に「学校教科書ノ利用、並ニ其乱用。芳流生。」との記事がある。そこでは例えば「徒ニ本文ノ字句ヲ暗誦セシムル」「生徒ニ思考ヲ与ヘズ唯書籍ノ云フ所ヲ主トスルモノ」「生徒ノ理解力ヲ進メズ記憶ニ注入スルヲ主トスル」「其事カラテ教ヘシテ其書籍ヲ教ヘントスル」「汝ノ教授ヲ書籍ノ奴隸トスルモノ」「教師ニシテ生徒ノ実験上ノ智識ト書籍上ノ智識トヲ調和結合スルコト能ハザルモノ」などはいずれも教科書の「乱用」であるとしている。一方、教科書を「生徒ニ智識ヲ与ヘンガ為ニ」「生徒ニ秩序アル仕事ヲ与ヘンガ為ニ」「生徒ノ時間及ビ能力ヲ使用スルガ為ニ」「教員ノ教授ヲ補佐センガ為ニ」用いるのは「利用」である、としている。(9頁)

64 註62と同じ。

65 「偶感漫録(統)」『教育報知』278号(明24・8・22) 3頁。

66 貝原益軒の略歴。寛永7年(1630)11月14日、福岡城中の東邸で生まれる。父は利貞、寛齋と号し黒田藩の祐筆であった。益軒は幼少より才名つとに高かったが、14才の時に本格的に儒学に志す。明暦3年(1657)28才のとき藩主光之の厚遇を得て京都に遊学、以後35才までの7年間において後年鴻儒として大成する基礎を築く。元禄18年(1700)71才で致仕するまで彼は儒臣として藩内の教育に尽力すること多大であった。この間『和俗童子訓』『大和俗訓』などいわゆる益軒十訓と呼ばれる教育書をはじめ『慎思録』『大疑録』など膨大な著述を残している。なかでも『和俗童子訓』は早期教育の重要性や“随年教法”を展開するなど極めて体系的な教育論書として注目される。かるがゆえに彼は、わが国教育学の祖とも仰がれている。なお彼は、戦前の国定教科書にも「度量」「寛大」「謙遜」「健康」などの徳目の人物教材として数多く登場している。(前掲『図説教育人物事典 上巻』148～153頁参照)

67 『貝原益軒 上巻』(日本教育思想大系 日本図書センター 昭和54年刊)197～8頁。なおこうした「経」「伝」としての書籍観に立って益軒はさらに、書を読む態度、扱い方について次のように述べている。「凡書をよむには、

必先手を洗ひ、心につゝしみ、容(かたち)を正しくし、几案(きあん)のほこりを払ひ、書冊(さく)を正しく几上におき、ひざまづきてよむべし。師に書をよみ習ふ時は、高き几案の上におくべからず。帙(ちつ)の上、或は文匣(ぶんかふ)、矮案(ひきゝつくゑ)の上にのせてよむべし。必人のふむ席にをくべからず。書をけがす事なかれ。書をよみおはらば、もとのごとくにおほひおさむべし。又書をなげ、書の上をこゆべからず。書を枕とする事なかれ。書をよみおはらば、もとのごとくにおほひおさむべし。若急速の事ありてたち去とも、必おさむべし。又書をなげ、書の上をこゆべからず。書を枕とする事なかれ。書の腦(のう)を巻きて、折返す事なかれ。唾を以、幅を揚る事なかれ。」(同上書198頁)

68 「修身教科用図書の編纂に就きて」『教育報知』265号(明24・5・20)1～2頁。

69 「教科書批評」同上誌394号(明26・11・4)10頁。

70 唐沢富太郎氏は、修身教科書の教化方法について神→天皇→権力者→教師→児童という方向的な流れの図を示し「このように教科書の教授法自身が、「天孫降臨」的な権威主義的な方法によっていたところに、教育それ自身が、常に国家の思想教化の具として顔役されていた一つの原因を見出すことが出来るのである。」(『教科書の歴史』創文社、昭和31年758頁)と指摘している。

(昭和59年11月7日受理)